

宮崎県文化財調査報告書

第 29 集

昭和61年3月

宮崎県教育委員会

宮崎県文化財調査報告書

第 29 集

昭和61年3月

宮崎県教育委員会

序

このたび、宮崎県文化財調査報告書第29集を刊行することになりました。宮崎県教育委員会では、文化財指定のための調査、また農耕・開発工事等によって発見された遺跡についての緊急発掘調査の結果をまとめて、毎年報告書を刊行しております。

今回は、昭和54年度に調査を実施した川南町東平下1号円形周溝墓、及び昭和58年度調査の野尻町九塚地下式横穴墓群、昭和59年度調査の宮崎市石神遺跡についての調査結果をまとめたものです。

本書が、本県の歴史解明のための学術研究上の資料として役立てていただくとともに、社会教育、学校教育の場においても広く活用されることを期待します。

なお、調査に際して御協力いただいた地元の方々、および市町村教育委員会の方々に深甚の謝意を表します。

昭和61年3月

宮崎県教育委員会

教育長 船 木 哲

例 言

1. この報告は、宮崎県教育委員会が実施した埋蔵文化財緊急発掘調査報告である。
2. 掲載しているのは、弥生時代遺跡 2 件、地下式横穴墓 1 件、合計 3 件についてである。
3. 執筆者名、調査期日等は下記のとおりである。なお、本書の編集は宮崎県教育庁文化課が担当した。

記

件	遺 跡 名	所在地	調 査 期 日	執 筆 者
1	東平下 1 号円形周溝墓	川南町	昭和55年 2 月25日～2 月29日	日 高 正 晴 夫 岩 永 哲 夫
2	九塚地下式横穴墓群	野尻町	昭和58年 8 月16日～8 月25日	北 郷 泰 道
3	石 神 遺 跡	宮崎市	昭和59年 8 月 6 日～8 月10日	近 藤 協

総 目 次

埋蔵文化財

1. 東平下 1 号円形周溝墓 1
 2. 九塚地下式横穴墓群 29
 3. 石神遺跡 55
- (付) 昭和59・60年度埋蔵文化財発掘調査一覧 73

東平下 1 号円形周溝墓

HIGASI HIRA SITA

例 言

1. 本報告は昭和55年2月県教育委員会が実施した児湯郡川南町東平下1号円形周溝墓の発掘調査報告である。
2. 本報告の内、I～IVは岩永哲夫、Vは日高正晴が執筆し、岩永が編集した。
3. 遺物の実測は、石川悦雄、津隈久美子、菅付和樹の協力を得た。
4. 本調査で出土した遺物は、埋蔵文化財センターで保管している。
5. 遺構実測図の方位は磁北を示している。

本文目次

I 所在地	1
II 調査の経過	1
III 遺構	1
IV 遺物	3
1. 主体部出土遺物	3
2. 周溝出土遺物	6
V まとめ	13

挿図目次

第1図 遺跡分布図	2
第2図 遺跡周辺図	3
第3図 円形周溝墓実測図	4
第4図 土層図	4
第5図 円形周溝墓主体部実測図	5
第6図 遺物出土状況実測図(1)	6
第7図 " (2)	6
第8図 " (3)	7
第9図 " (4)	7
第10図 主体部出土遺物実測図	7
第11図 周溝出土遺物実測図(1)	8
第12図 " (2)	9
第13図 " (3)	11
第14図 " (4)	12

図 版 目 次

図版 1	発掘風景	19
図版 2	円形周溝墓の発掘状況	20
図版 3	周溝内の土器出土状況	21
図版 4	周溝内の高杯出土状況	22
図版 5	主体部	23
図版 6	出土遺物(1)	24
図版 7	“ (2)	25
図版 8	“ (3)	26
図版 9	“ (4)	27

I、所在地（第1図）

遺跡は、東流して日向灘へ注ぐ名貫川なぬきの南約1.6km、東の海岸線から約3.8kmの通称からせざる唐瀬原台地の標高約90mの畑地に所在する。唐瀬原台地は主に畑地として利用されているが、北東～南西方向に直交して碁盤目状に農道が走るなど整然と区画整理された平原が広がっている。遺跡はその平原の北東端部にあたる。1号円形周溝墓のある畑の行政地番は大字川南19049番地である。

II、調査の経過

昭和54年3月初旬、畑の耕作によって直径7mから15mほどの円形周溝墓5基、土壌墓7基が発見された。川南町文化財保護審議会委員遠藤学氏によると、この地域では畑の耕作に際し、各地から住居跡や土壌墓などの遺構とともに土器が発見されるということであった。この周溝墓群も遠藤氏の日頃の注意により確認されたものである。調査はこれらの遺構の性格解明を目的として群の中の1基について翌昭和55年2月25日から29日にかけて県教育委員会を調査主体者として実施した。

調査には県文化財保護審議会委員日高正晴、文化課岩永哲夫があたり、川南町教育委員会社会教育課長稲井正耕氏をはじめ課員の方々、更に川南町文化財保護審議会委員の方々、土地所有者森木清美氏の多大な協力を得た。記して感謝申し上げる。

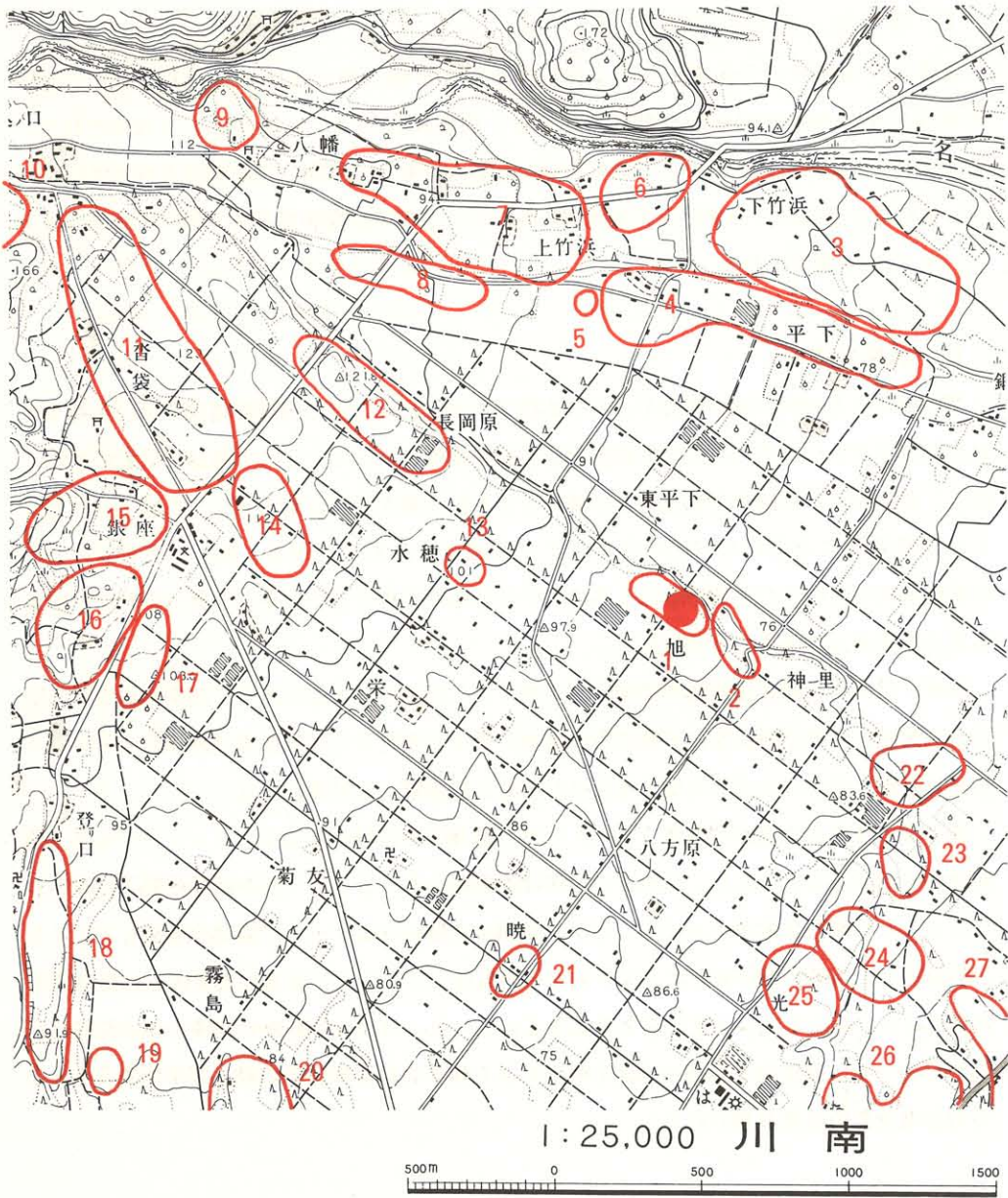
調査は、予定の畑地が牧草地であったため、遠藤氏の記録をたよりにトレンチによる遺構確認から始めることにした。初めの2日間は陸橋部にあたる地点（当初は陸橋部とはみられなかった）の礫石を確認するに留ったが、周囲の発掘から両サイドに周溝が連続していくことが判明し、周溝を追跡するようにトレンチを延長していった。ある程度拡張した段階で中央付近にトレンチを入れ、主体部を確認するに至った。日程の制約から周溝全体の完掘は行なわなかった。調査中、西側の畑地が機械により耕やされたが、その際、翌年調査された2号方形周溝墓(注)の輪郭が現われた。

（注）日高正晴・山中悦雄「東平下周溝墓群—2号方形周溝墓—」『川南町文化財調査報告1』

1982年。

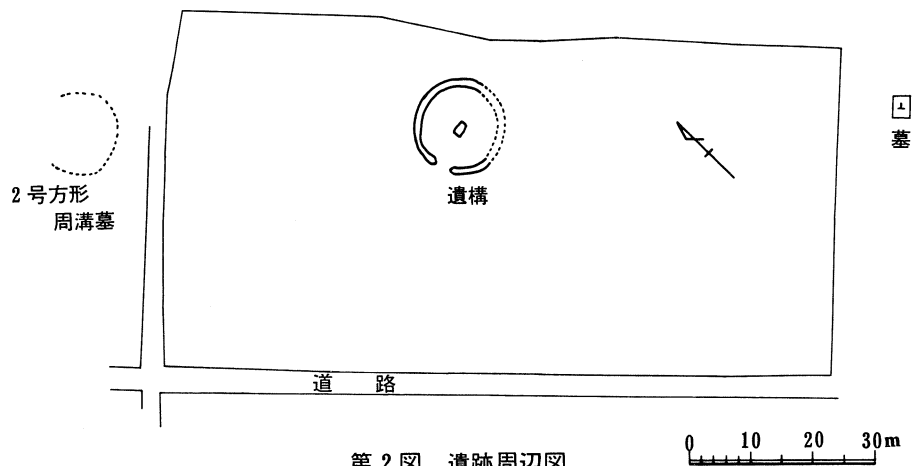
III、遺構

遺構は直径約15mの円形状周溝と中央に主体部を有する円形周溝墓である。周溝は南西の



1. 東平下1号円形周溝墓(東平下A遺跡) 2. 東平下B遺跡 3. 下ノ原遺跡 4. 形山上遺跡 5. 上ノ原北分A遺跡 6. 寺屋敷遺跡 7. 古場山遺跡 8. 上ノ原北分B遺跡 9. 八幡遺跡 10. 込ノ口遺跡 11. 杓袋畑遺跡 12. 長岡原遺跡 13. 新耕原遺跡 14. 銀座遺跡 15. 黒岩遺跡 16. 蔵座村遺跡 17. 山本遺跡 18. 霧島遺跡 19. 葛掛原遺跡 20. 豊坂遺跡 21. 香田原遺跡 22. 明原遺跡 23. 昭和遺跡 24. 向原B遺跡 25. 光遺跡 26. 向原A遺跡 27. 塩付遺跡

第1図 遺跡分布図



第2図 遺跡周辺図

位置に幅約2.5mの陸橋部をもち、その部分に20個ほどの大きめの礫の集積があった。また、集積礫の横に1×1mほどの土壌状掘り込みがみられたが、円形周溝墓との関連はわからなかった。陸橋部に接する周溝端は丸く掘り込まれている。周溝の上面は耕作によって削り取られ、場所によって異なるが底面から10~20cm残っているのみで、1~1.5mの幅が計測された。現地表から溝底までの深さは60cm前後であった。遺物は陸橋部の南側に1ヶ所、北側に3ヶ所の土器群が検出された。

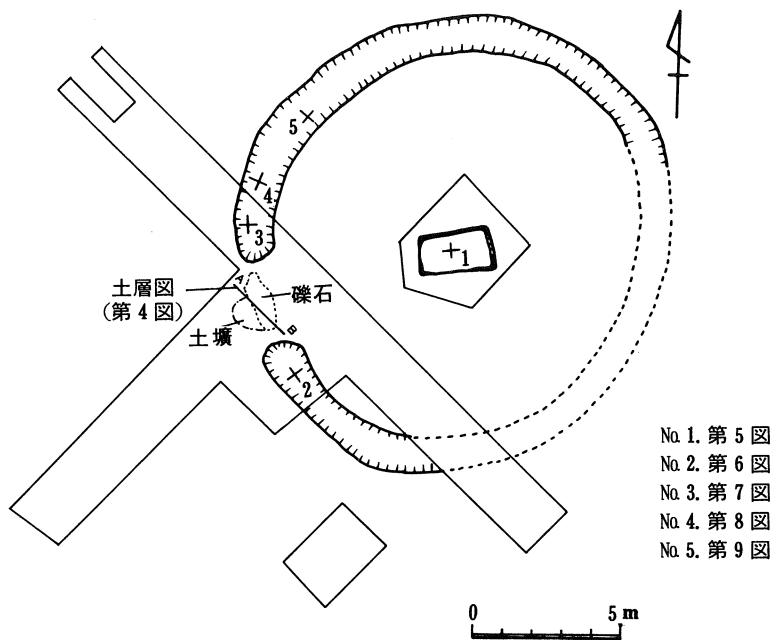
中央に位置する主体部は240×160cmの方形状墓壇をなし、ほぼ垂直に近く掘り込まれている。長軸の延長線上に陸橋部がある。墓壇の上端は、耕作により削取されているので正確な深さはわからないが、現存での計測値は60cmである。現地表から壇底までは102cmを測る。墓壇内には29個の礫を方形状に並べ、屍床を形成している。屍床の内径は190×60cmであり、西側に60×65cmの範囲で朱がみられることから、西に頭位を向けての単体埋葬であったと考えられる。また、朱に接して直刀1振が鋒を頭位に向け、副葬されていた。

IV、遺物

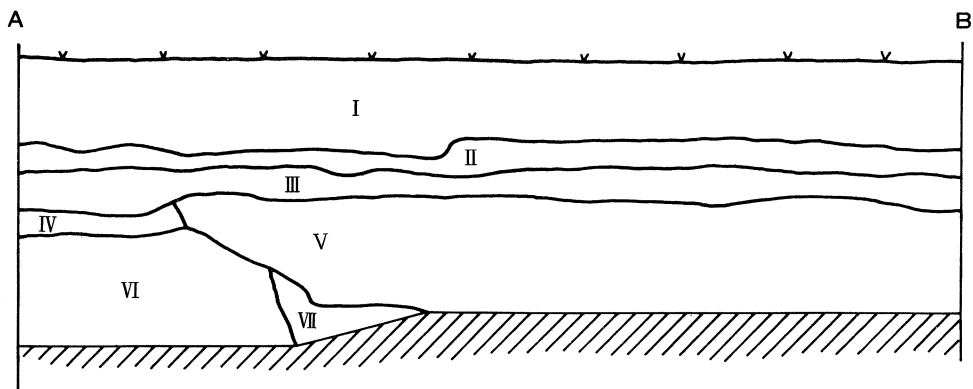
1. 主体部出土遺物（第10図）

直刀

総長73.6cm、身幅（中央付近）2.9cm、棟幅0.5cmを測る。刀身の先端近くに朱の付着がみられる。柄部には銹化した組紐が七巻きほど残り、刀身には織布が一部付着して残っている。

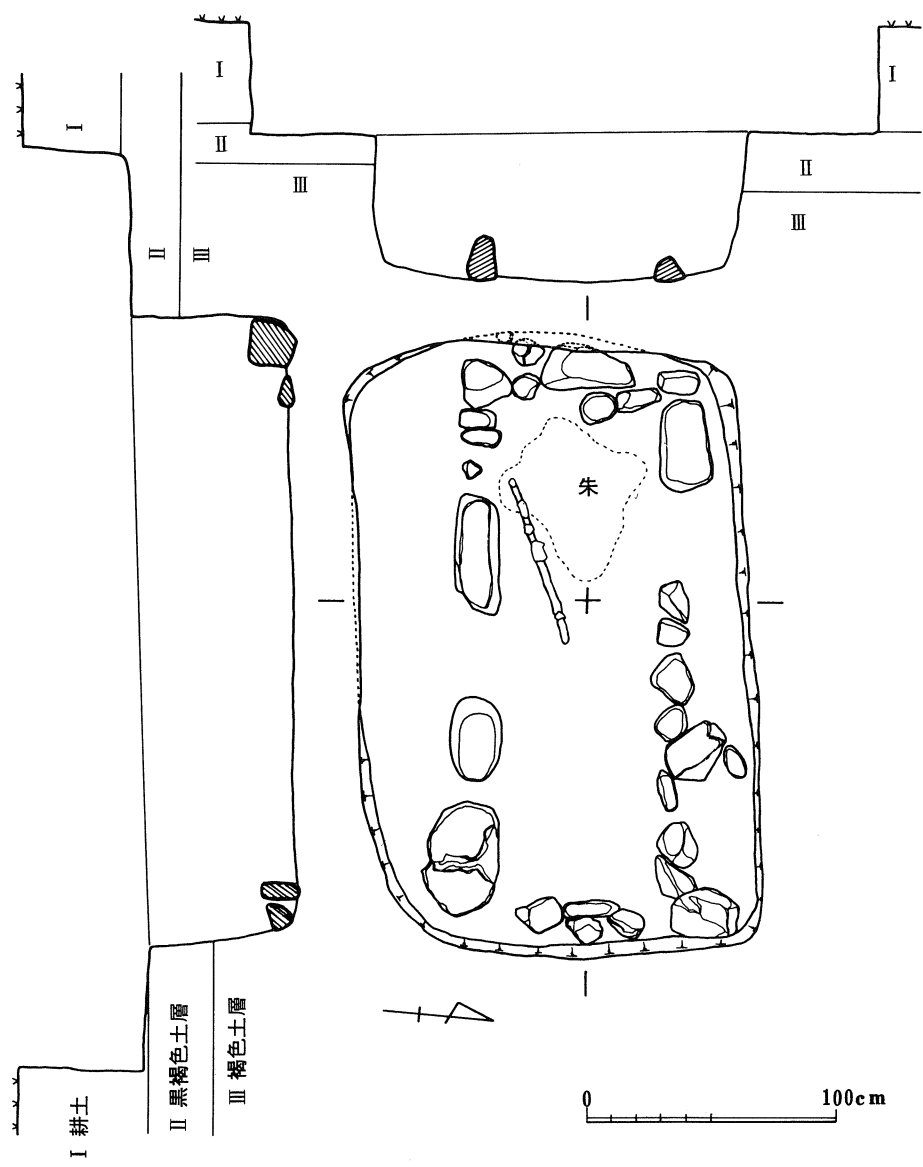


第3図 円形周溝墓実測図

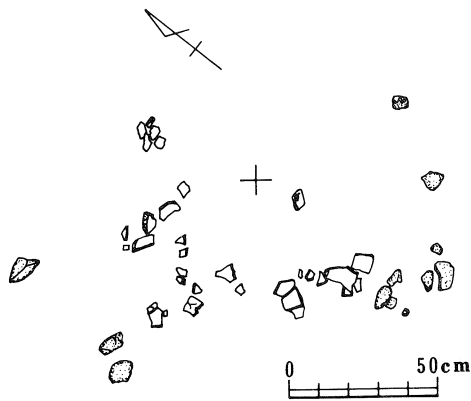


- I 耕土
- II 黒土層
- III 灰黒色土層
- IV 赤ホヤ層 (黒、褐色土混)
- V 攪乱層 (黒、赤ホヤ、褐色土混) 黒多
- VI 褐色土層
- VII 攪乱層 (黒、赤ホヤ、褐色土混) 褐色多

第4図 土層図



第5图 円形周溝墓主体部実測図



第 6 図 遺物出土状況実測図(1)

器高 27.5 cm、頸部径 15.5 cm、胴部最大径 23.5 cm、底径 6 cm を測る。焼成不良の為か器面の摩耗が著しい。器面調整は口縁部はナデ、胴部はヘラナデである。胎土は 1~2 mm の砂粒を含むが、きめは細かい。全体的には褐色を呈するが、約 3 分の 1 ほどの器面は赤褐色に近い。

2 は口縁部が丸みを帯びて外反し、頸部屈折して胴部は丸く膨らむ。最大径は胴の中央付近にあり、底部は小さい平底である。口径

16.5 cm、器高 17.1 cm、頸部径 11.9 cm、胴部最大径 17.9 cm、底径 4.0 cm を測る。器面調整は口縁端部はヨコナデ、口縁部は内外面とも頸部から胴上半部まで斜めのハケ目がみられ、胴下半部は粗いヘラナデを施している。内面はハケ目が残っている。胎土には 1~4 mm の砂粒が多く、粗い。焼成やや不良、褐色を呈しているが、4 分の 1 ほどは黄褐色を呈する。

1・2 とも第 3 図 No. 3 の地点から出土。

壺形土器 (第 11 図 3、第 12 図 4~7)

3 は頸部および口縁部を欠く胴部から底部にかけての土器である。胴部は、短胴形をなし中位に最大径をもち、推定 22 cm 程度であろうか。底部は径 2 cm、厚さ 0.5 cm ほどの小さな貼付け底部である。外面は良く調整され、ヘラミガキが施されている。径 1~2 mm の砂粒

2. 周溝出土遺物 (第 11 図 ~ 第 14 図)

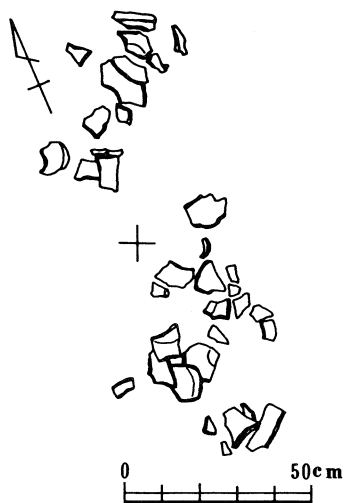
周溝部からは甕形土器、壺形土器、鉢形土器、高杯形土器、器台形土器が出土している。

甕形土器 (第 11 図 1・2)

1 は口縁部が短かく外反し、頸部屈折してゆるやかに膨らみをもちながら胴部上半部に最大径をもつ土器である。底部はわずかに丸みを帯びた平底をなしている。口径 21.0 cm、



第 7 図 遺物出土状況実測図(2)



第8図
遺物出土状況実測図(3)



第9図
遺物出土状況実測図(4)

を含み粗い胎土である。焼成良好で褐色を呈している。

4は二重口縁の壺形土器である。頸部には斜めの刻み目をつけた貼付け突帯を有し、外反しながら口縁屈折部に至り反転して内曲する口縁になる。口縁部には3条の幅の広い凹線が巡っている。口径18.0cm、頸部径9.5cmを測る。焼成は悪く、摩耗が著しいが、頸部上方にたてのハケ目がみられる。胎土には1~5mmの砂粒を多く含む。褐色を呈する。第3図No.4~5の地点から出土している。

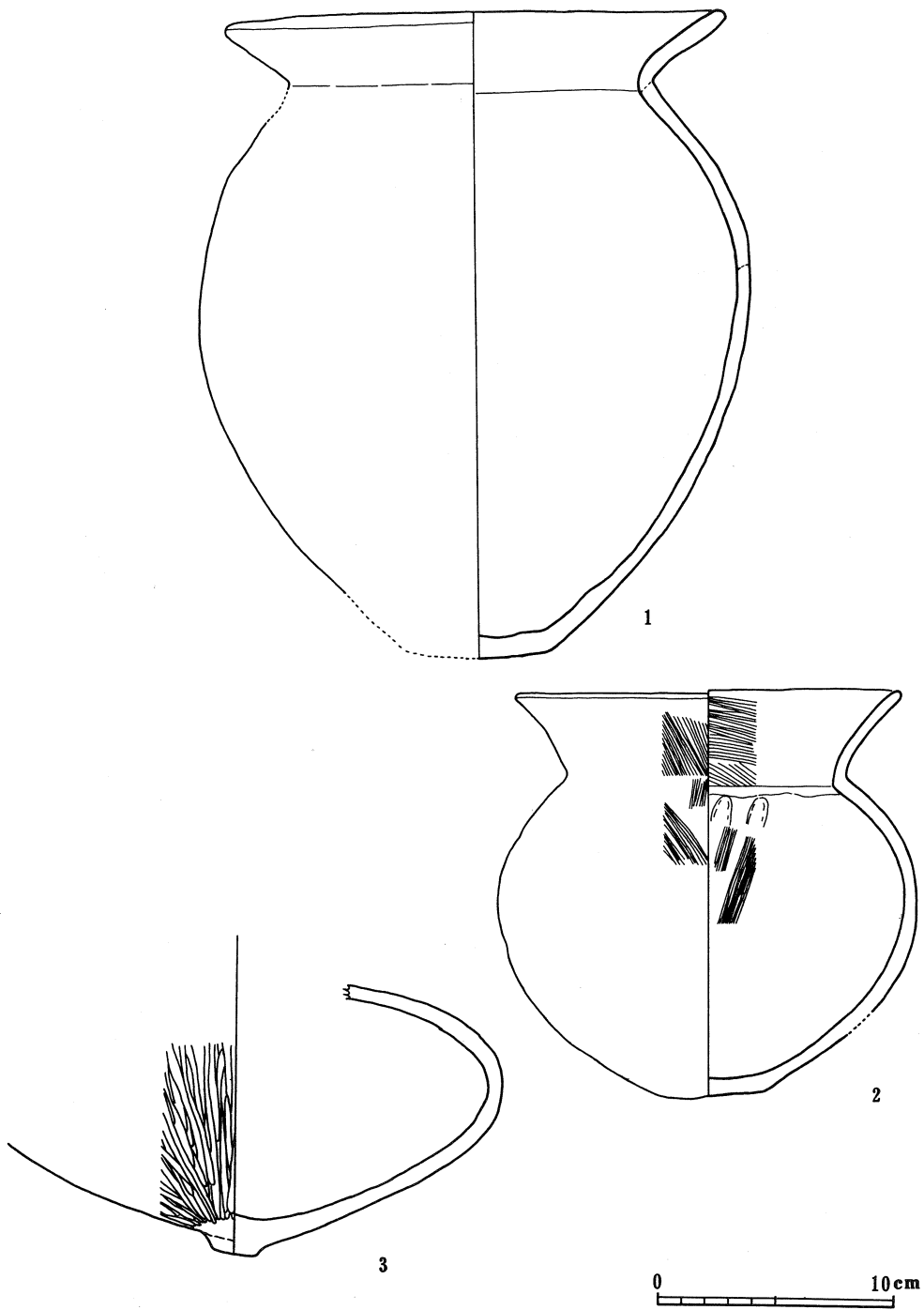
5は胴部下半から底部にかけてのもので、底径5.5cmの平底である。内面にハケ目痕、外面は底部に近くヘラナデ痕を残している。4と同様の胎土である。焼成不良、褐色を呈するが、底部から胴部下半にかけて大きな黒斑が広がっている。

6は口縁部に櫛描波状文が巡っている。口径18.7cm、頸部径8.4cmで頸部に突帯はない。胎土は粗く、1~3mmの砂粒を多く含む。焼成不良で極めて脆い。明るい褐色を呈する。

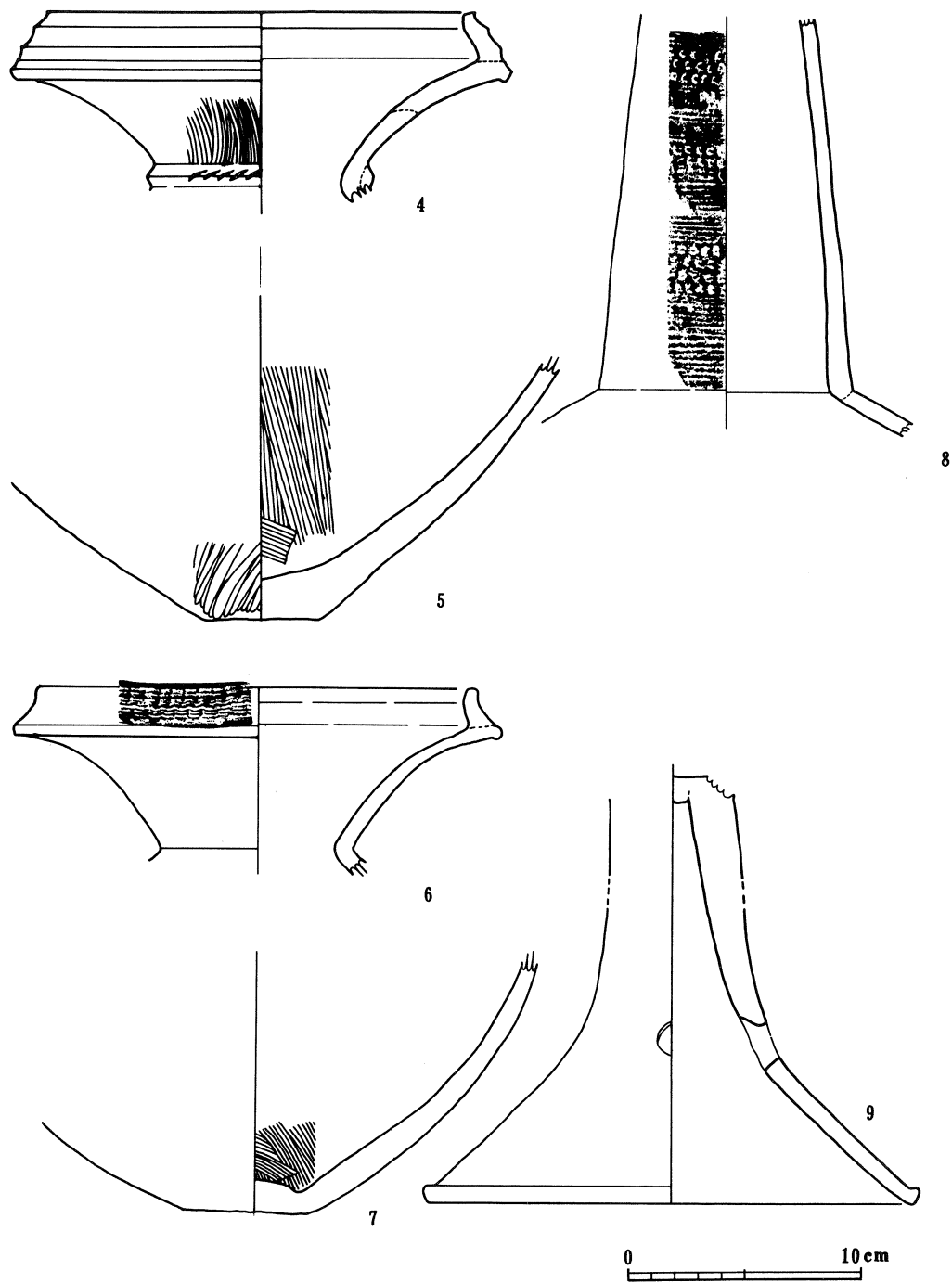
7は底径約5cmを測る。内面底部付近のみハケ目を残し



第10図
主体部出土遺物実測図



第11图 周溝出土遺物実測図(1) (縮尺 1 / 3)



第12图 周溝内出土遺物実測図(2) (縮尺 1 / 3)

ている。胎土に1~3mmの砂粒を多く含み、粗い。焼成不良、淡褐色を呈する。

高杯形土器（第12図9、第13図10~12、第14図16）

9は杯部を欠いた脚部であり、脚端に向かってなだらかにラッパ状に開く。杯底からの器高は18.5cm、脚端部での径は21.0cmである。屈折度の最も強い付近に径1.5cmの円形透し孔を4ヶ所にもつ。下位にヘラナデの調整痕を残す。1~5mmの砂粒を多く含む。焼成やや良好で褐色を呈する。

10は杯部・脚部が浅く、大きく外反しながら開く、口径31.5cm、器高23.2cm、脚端部径28.0cmの装飾高杯である。杯部は底部に近い所で屈折し、大きく反転して外方へ延び口縁端に至る。端部には櫛描波状文を施した1.4cm幅の貼付け装飾帯を有する。脚部は裾を広げながら脚端に至るが、第一屈折部の4ヶ所に円形透し孔を穿ち、第二の屈折部には突出した施文部をもち、突出部に斜めの刻み目、その上・下位に一系列の竹管文が巡っている。また屈折部の上位に4ヶ所、下位に4ヶ所の円形透し孔をもつが、透し孔の径はすべて1.7cmを測る。脚端部も杯部同様大きく外反し、端部はわずかなふくらみをもち、丸く仕上げている。杯部の調整は風化のため不明瞭であるが、第1屈折部から下位は明瞭に残り、縦方向にヘラミガキが施されている。軸部の内面は指頭によるナデ、透し孔にあたる部分は細かなハケ目がある。ラッパ状に開く部位はヨコナデである。胎土には2~5mmの砂粒を多く含み、粗い。焼成良好、褐色を呈するが、黒斑もみられる。第3図No.5地点出土。

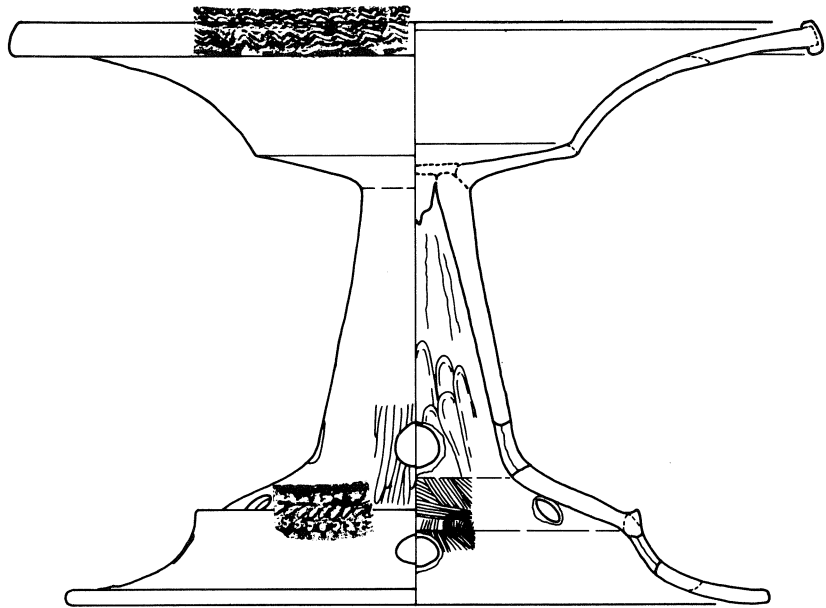
11は杯部のみであるが、10に類似する。口縁端部の櫛描波状文の貼付けがあるが、10が丸く形づくっているのに対し、直線的である。調整は外面にヘラナデ、ミガキが残っている。胎土には1~3mmの砂粒を多く含む。焼成良好、内面は褐色を呈するが、外面は黄褐色に近い。第3図No.3~4地点出土。

12は推定口径29.5cmの杯部である。外面には縦にハケ目、口縁内面は縦にヘラナデ調整している。胎土には1mm程度の砂粒を多く含んでいる。焼成良好、褐色、内面口縁部は黒褐色である。第3図No.4地点出土。

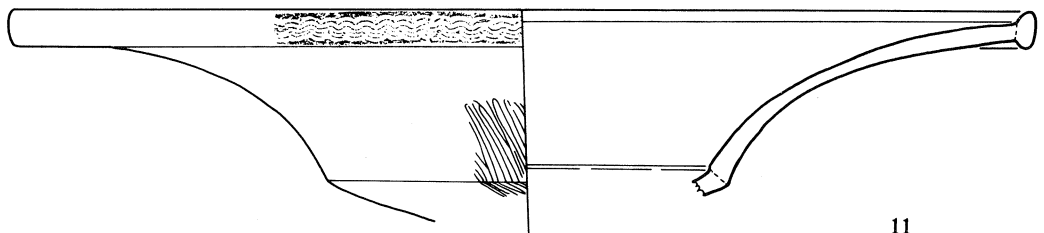
16は杯部と脚端部を欠くが、器形的には10に類似する点がある。屈折部の上位と下位に径1.9cmの円形透し孔がそれぞれ5ヶ所ずつある。調整は器面が脆く、不明瞭である。胎土には1~2mmの砂粒を多く含むが、きめが細かい。第3図No.4地点出土。

鉢形土器（第14図14・15）

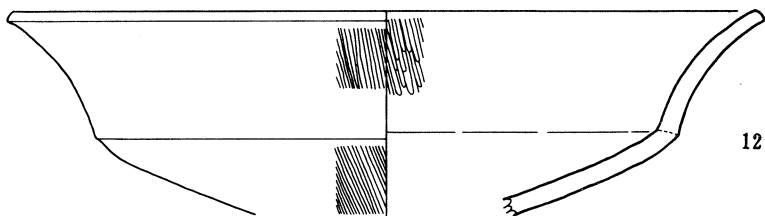
14は内彎する口縁部から頸部で屈折し、彎曲しながら底部に至る器形である。底部は木ノ葉の圧痕がみられ、径が2.9cmの小さな平底状を呈する。口縁部径26.0cm、器高11.6cmを測



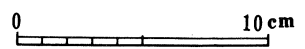
10



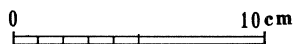
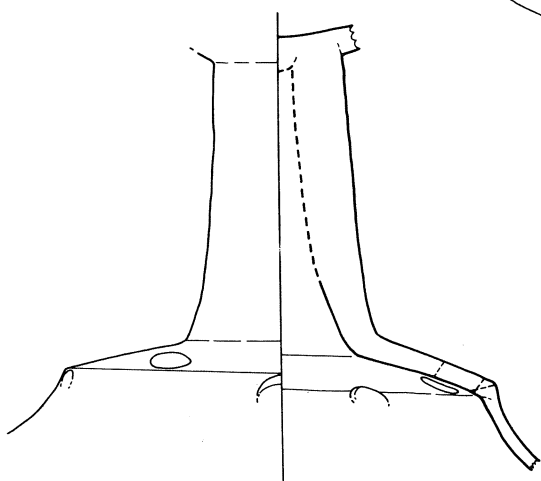
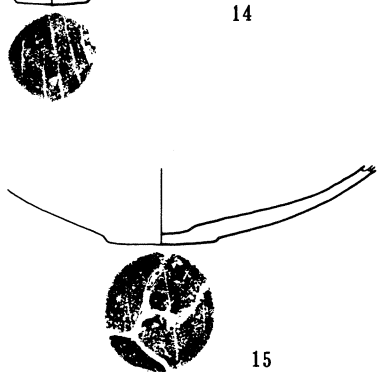
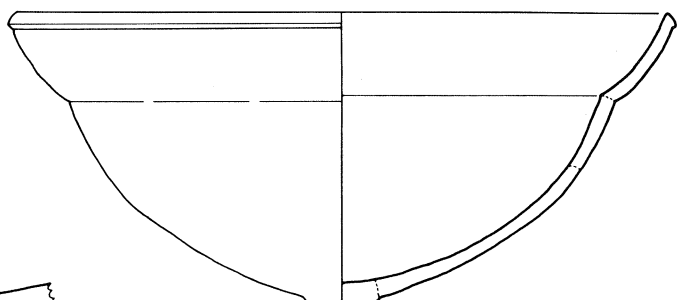
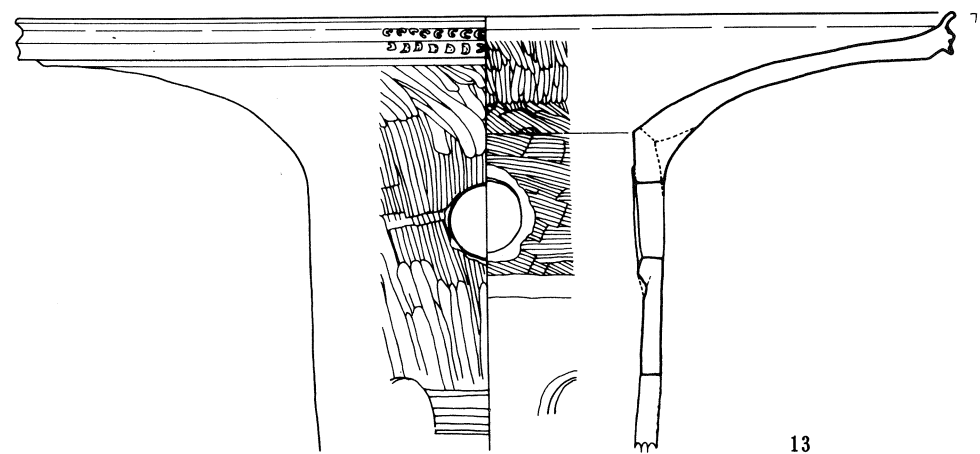
11



12



第13図 周溝内出土遺物実測図(3) (縮尺 1 / 3)



第14図 周溝内出土遺物実測図(4) (縮尺 1 / 3)

り、全体的に器厚は薄い。胎土に1~3mmの砂粒を多く含んでいる。焼成はやや不良、淡褐色を呈するが、胴部に黒斑がみられる。第3図No.3地点出土。

15は底部から胴部への開きが大きく、器厚も薄く、器形的にも14に類似する。底部に木ノ葉とみられる圧痕がわずかに残り、径4.5×4.8cmの楕円形状底部である。胎土に1~3mmの砂粒を多く含んでいる。焼成も良いとは言えず、暗褐色に近い色調である。14・15とも器面が脆く、調整は不明である。第3図No.3地点出土。

器台形土器（第12図8、第14図13）

8は脚部とみられ、全面に櫛歯状横線文と3~4段一組みの竹管文を交互に、竹管文施文帯に比して横線文の施文帯を2~3倍にとりながら施文を広げている。脚屈折部の径は10.9cmを測る。全体的に脆く焼成は良くない。1~2mmの砂粒を含む。色調は暗褐色や褐色など一様ではない。第3図No.3地点出土。

13は下半部を欠失しているが、口径37.5cmの器台である。口縁端には二条の竹管文が巡っている。胴部には径2.9cmの円形透し孔を4ヶ所ずつ2段に配している。下位の透し孔に接して不規則的な横線を施している。調整は外面はハケ目の上に粗いヘラミガキ、口縁部の内面はヘラミガキ、屈折部付近から下方には斜めのハケ目がみられる。胎土には1~3mmの砂粒を含んでいる。焼成良好、褐色を呈するが、口縁内面には黒斑も広がっている。第3図No.4~5地点出土。 (岩永哲夫)

V ま と め

川南の平原に展開する大弥生遺跡群の中で、時折、畑地内に黒色の円形状、あるいは方形状の痕跡が認められたので、もしかすると宮崎県では例のない周溝墓ではないかという推測の下に、発掘調査の必要性を強調していた。調査は昭和55年2月、県教委主催で行われたが、予想通り完全な円形周溝墓⁽¹⁾が出現した。それにしても、この様に本格的な円形周溝墓は県内では初現的な発見であったので、古代日向の弥生文化から古墳文化へ移行する時期の解明に有力な資料を提供することになった。しかし、宮崎県においては、以前に周溝墓類似の遺跡⁽²⁾が調査されており、その遺構を、その後、方形周溝墓として発表もされているので、その遺跡について述べてみることにする。それは昭和39年12月、県教育委員会により発掘調査された都城市年見川流域の年見遺跡において、当時は弥生終末期頃の住居址であると推察されていたものを、その後、方形周溝墓であるとの考察もなされているが、この遺跡で問題になるのは同一遺構内に竪穴住居址と推測される柱穴が発見されていることである。立地的に周溝

墓と住居址が併存することは、ほとんどあり得ないので、この遺構を方形周溝墓として認めることは躊躇したい。また、本遺跡についての正式報告書も、まだ出ていない現在、結論的な判断はできないと思う。なお、昭和39年といえば、同年、東京都八王寺市の宇津木遺跡において、始めて方形周溝墓という名称が提唱された時でもある。次いで、昭和56年3月にはこの1号円形周溝墓から北西約50mの地点で、方形周溝墓も発見された。ところで、この円形周溝墓には中心に長方形の土壇が現われ、しかも興味あることは、その床面に自然の礫が長方形に並べられ石囲み状になっていたことである。そして被葬者の胸部と思われる所には斜めに直刀が納置されていたが、恐らく宮崎県内出土品では最古の鉄刀ということになる。

さて、前述した土壇墓の主体をなす長方形の石囲みであるが、この埋葬法に類似した遺跡として、年代的には遡るけれども、山口県土井ヶ浜⁽³⁾の弥生遺跡での前期に属する78体の完全人骨のうち、埋葬施設が長方形に礫によって囲まれているものが3例確認できた。また、この東平下周溝墓内の長方形石囲みの西側床面には、水銀朱と推定される真赤な朱が認められたが、その位置は、ちょうど被葬者の頭部が安置された場所にあたっている。ところで、この土壇内に朱を納める習俗であるが、日本には古くから「赤いもの」には呪力があるという信仰が伝承されている。赤米の呪力信仰も、そのことに由来しており、すなわち、この呪力によって被葬者の死霊を鎮めるという信仰儀礼によるものである。

それから石囲みの遺構も同様、石の呪力によって被葬者の魂が外部に出て人びとにわざわざを及ぼさないようにするための信仰的な意味を有している。このことに関連して、さらに注目されることは円形周溝墓に伴う陸橋部に20数個の礫が納置されてあったことである。これも前に述べたように、石の有するマナイズム的な呪力により、死霊がその墓域から出ないようにするための埋葬儀礼に基づくものであろう。さて、この東平下の1号円形周溝墓が発見された時期までは、九州地方においても円形の周溝墓というものは、ほとんど姿を見せていなかったが、昭和47年から49年にかけて発掘調査された熊本県城南町の塚原古墳群に、この円形周溝墓に関連ある遺構が発見されているので、そのことについて論述してみたい。

熊本県教育委員会の調査報告書⁽⁴⁾によると、この古墳群内で検出された墳丘を有しない円形の周溝を、封土が除去された円形墳として記述されている。その根拠としては『肥後国誌』などにも見えるように、塚原台地上には「九九塚」という伝承も残っており、古墳の群集地帯であったので墳丘が削平された後、地表面下に円形周溝の遺構が残存したように記されている。すなわち、塚原遺跡群内の約30基に及ぶ丸山遺跡群の円形周溝墓を高塚古墳跡とみなしている。もし、古墳の周溝であれば、この陸橋部を伴わないのが一般的であり、また中心

の地表面下に土壌を有する形式の高塚古墳であれば、どうしても特殊形式の原始墳墓とみななければならないようになり、高塚古墳の範疇外で考察しなければならなくなる。そして、大部分の周溝墓から出土した土器類も、ほとんど古式土師器であり、それに須恵器を出土した周溝も6基だけであるが、その土器も古式の須恵器が多い。なお、この塚原台地上から、ともに発見された39基の方形周溝墓から出土した土器類も円形周溝墓と同様、古式土師器が検出された。それから丸山4号墳のように近年まで墳丘の一部が残っていたとあるが、極く最近では方形周溝墓の中に低墳丘を有する事例が、わずかではあるが確認されている。後述する西都市上野遺跡の1号円形周溝墓においても、約60cmの高さを有する円形状の盛り土が存在した。このように考察してみると、この塚原の周溝墓群は、どうみても円形周溝墓とみなした方が穏当と考えられる。それに関心をそそられることは、この塚原の円形周溝墓の形態が東平下1号円形周溝墓と全く同一形式であるということである。そして周溝の中心にある土壌墓の主軸線も、東平下、塚原ともに陸橋部を向いている。また編年的にも塚原と東平下の両円形周溝墓の間には、あまり年代差はなく、古式土師器だけを出土した塚原の円形周溝墓は東平下の円形周溝墓に次ぐ時期に推定される。その後、県内においては昭和58年11月末から12月初旬にかけて西都原古墳研究所が行った茶臼原台地の⁽⁵⁾上野遺跡において、前述したように楕円形状の円形周溝墓が発見された。さらに昭和59年8月から60年1月にかけて新富町教育委員会が主体になって行った新田原台地の⁽⁶⁾川床地区遺跡においても、土壌墓群とともに多数の円形周溝墓が確認された。年代も古墳時代初期に比定されているので、東平下の円形周溝墓とも関連があると思われる。

さて、この1号円形周溝墓出土の土器類については、その翌年、発掘調査された2号方形周溝墓に⁽⁸⁾関係づけて論及されているけれども、さらに本論考においても、この円形周溝墓の年代について考察してみたいと思う。その場合、編年比定の決め手になるのは周溝墓から出土した土器類である。

ところで、この土器類は円形周溝墓の西側にあたる陸橋部の両側に、破碎された状態で納置してあったが、恐らく中心の土壌墓に埋葬された被葬者の霊を鎮めるための祭祀儀礼に使用された供献用の土器であり、円形台上部で行われた鎮魂儀礼の祭事終了後、この周溝に納められたものと考えられる。そして興味を覚えることは死霊の出口と信じられた陸橋部を挟むように、すべての土器類が納置されていたことである。このことも土器の有する呪力で被葬者の魂を鎮める信仰儀礼によるものであろう。

次に、東平下出土の土器編年であるが、ちょうど、この時期の土器については、九州での

年代考察がおくれているが、最近では、この時期の発見例がふえ、だいぶ論議され出した。特に、宮崎県において初めて出現したこの周溝墓出土の土器類は、弥生終末期から古墳時代前期に移行する過渡期の遺物として注目される。この東平下の土器類は、壺形、甕形、高杯形、鉢形、器台形など変化に富む器形を有しているが、まず、関連遺跡として、大分県国東半島先端部に位置する安国寺遺跡出土の安国寺式土器をとりあげてみたい。この土器形式の特色は、まず、在地性の強い「く」の字形複合口縁を有する壺形土器の存在であるが、このタイプは川南町一帯にも特に多く散布している形式であり、安国寺式土器分類ではⅦ式に分類されている。⁽⁹⁾

また森貞次郎氏は東九州弥生式土器を5形式に分類し、さらに第Ⅴ様式をA、B、Cに区分されている。そして、この複合口縁の壺形土器はB式に入れて「いわゆる安国式土器」と称され、弥生式土器の伝統を残す土師式土器とされている。この安国式土器は安国寺遺跡が立地的に瀬戸内をひかえ、豊後水道の入口にあたることから東瀬戸内、および畿内方面の影響を受けながら独自の文化性を樹立していった。次いで、この周溝墓からの出土の土器で白眉ともいうべき赤褐色の完形装飾高杯であるが、この高杯は畿内では庄内2式に分類され、さらに東瀬戸内の酒津式土器に関連を有しながら類似の形式が安国寺式土器の中にみうけられる。しかし優美なこの装飾高杯と全く同一形式の土器は東九州地方にはみられない。また、口縁部が外反りして大きく開く鉢形土器は安国寺式土器の中に同一形式をみることができるが、武末純一氏は前述の装飾高杯土器および鉢形土器とともに最古式土器に比定されている。⁽¹⁰⁾⁽¹¹⁾

それからこの東平下の円形周溝墓には庄内式系の甕形土器も出土しているが、この外来系土器の流入した時期から最古式土師器とみなしたい。その時期は前述した武末氏の分類とも符合する。また、最近、発掘調査が行われた熊本県山鹿市の方保田東原遺跡⁽¹²⁾においても、庄内式の外来系甕形土器が出現した時期をもって最古式土師器の初現としている。⁽¹³⁾

なお、そのほか脚柱が曲線を呈する裾開き高杯の脚部土器、および器台形土器などは、さきに述べた森貞次郎氏分類のB式にあてられるが、また、かど張って裾開きする高杯の脚部土器も既述した庄内2式に含まれる。

以上、安国寺式土器を焦点にしなが、畿内系、瀬戸内系外来土器の考察もしてきたが、これらの土器類を検討した結果では、東平下1号円形周溝墓出土の土器類は最古式土師器の時期頃に推定されそうである。

以上、この円形周溝墓の年代考察を試みてきたが、いずれにしても、この被葬者は、川南台地に弥生末期頃以来、共同社会的集落の中で、首長的地位にあったと考えられる。なお、土

墳墓内に直刀が副葬してあったことも、一層、司祭的リーダーの存在を象徴していることになる。また、この東平下遺跡から西南約7kmの町内西別府には100m有余もある柄鏡様式の大塚古墳をはじめ前方後円墳を含めて約50基の川南古墳群が存在するが、さらに、この遺跡から南9kmの高鍋町の台地上にも前方後円墳10基を含む85基の持田古墳群が展開している。このような古代的環境の中で、川南地方における周溝墓群の被葬者らが、その後、同一台地上における大古墳群形成の時期に、どのように対応していったのか興味深いことであるが、一方、この地方は古く「子湯県」と称され、古代日向では最も繁栄した地域でもある。特に、日向中央平野部の大古墳群を包含する西都原⁽¹⁴⁾古代文化圏の形成にこの川南の大周溝墓群がどのように関連するのか、今後、解明しなければならない課題である。

(日 高 正 晴)

注

- (1) 日高正晴「川南町東平下の円形周溝墓」『宮崎考古』第6号、宮崎考古学会、昭和55年10月
同上 「東平下1号円形周溝墓」『川南町史』川南町、昭和58年10月
- (2) 宮崎県立博物館『図説 宮崎の歴史』昭和42年3月
- (3) 金関丈夫、坪井清足、金関 恕「山口県土井ヶ浜遺跡」『日本農耕文化の生成』第1冊本文篇、東京堂、昭和36年3月
- (4) 熊本県教育委員会『塚 原』熊本県下益城郡城南町所在塚原古墳群の調査、1975年3月
- (5) 山岸良二「方形周溝墓の諸問題」『方形周溝墓』ニュー・サイエンス社、昭和56年5月
- (6) 日高正晴「上野遺跡1号」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第1集、西都市教育委員会、昭和60年5月
- (7) 有田辰美『川床地区遺跡』概報、新富町教育委員会、昭和60年5月
- (8) 日高正晴・山中悦雄「東平下周溝墓群—2号方形周溝墓」『川南町文化財調査報告1』1982年3月
石川悦雄「宮崎平野における弥生土器編年試案」『研究紀要』No.8、宮崎県立総合博物館、昭和58年3月
- (9) 賀川光夫「第5章遺物—土器」『大分県国東町 安国寺弥生式遺跡の調査』九州文化総合研究所編、昭和33年3月

- (10) 森貞次郎「東九州地方」『弥生式土器集成・本編』小林行雄・杉原莊介編，東京堂，昭和39年1月
羽田野光洋「東九州における弥生式土器研究Ⅰ，安国寺式土器の再検討」『古文化談叢』第5集，九州古文化研究会，1978年10月
- (11) 関川尚功「纏向遺跡の古式土師器」『纏向』石野博信，関川尚功，榎原考古学研究所
1976年9月
- (12) 武末純一「大分県国東郡国東町安国寺遺跡」『古文化談叢』第3集，九州古文化研究会
1976年9月
- (13) 山鹿市教育委員会『方保田東原遺跡』山鹿市立博物館調査報告書，第2集，昭和57年3月
- (14) 日高正晴「日向の古墳と西都原古代文化圏」西都原古墳研究所、年報，創刊号，西都市教育委員会，昭和59年3月
日高正晴「古代日向における西都原古墳文化の形成」西日本史学会宮崎支部報，宮崎大学教育学部内，1985年7月

図版 1
発掘風景



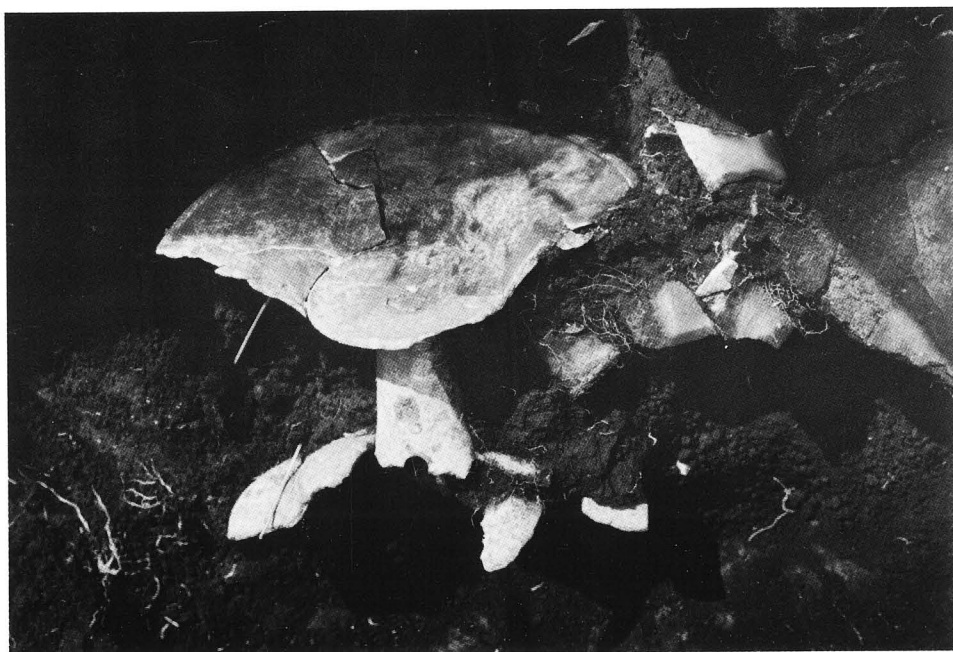
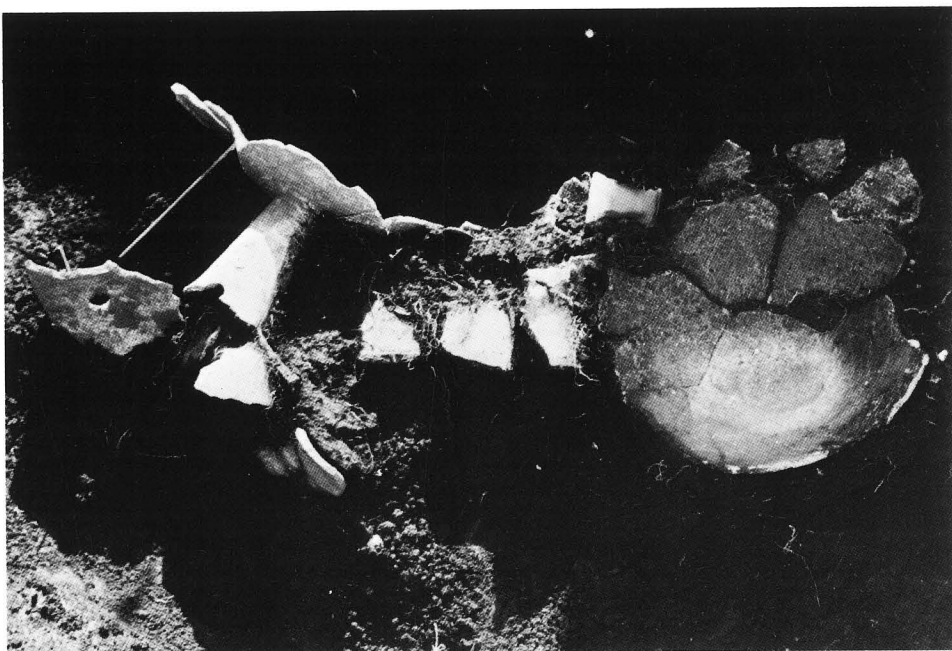
図版 2
円形周溝墓の発掘状況



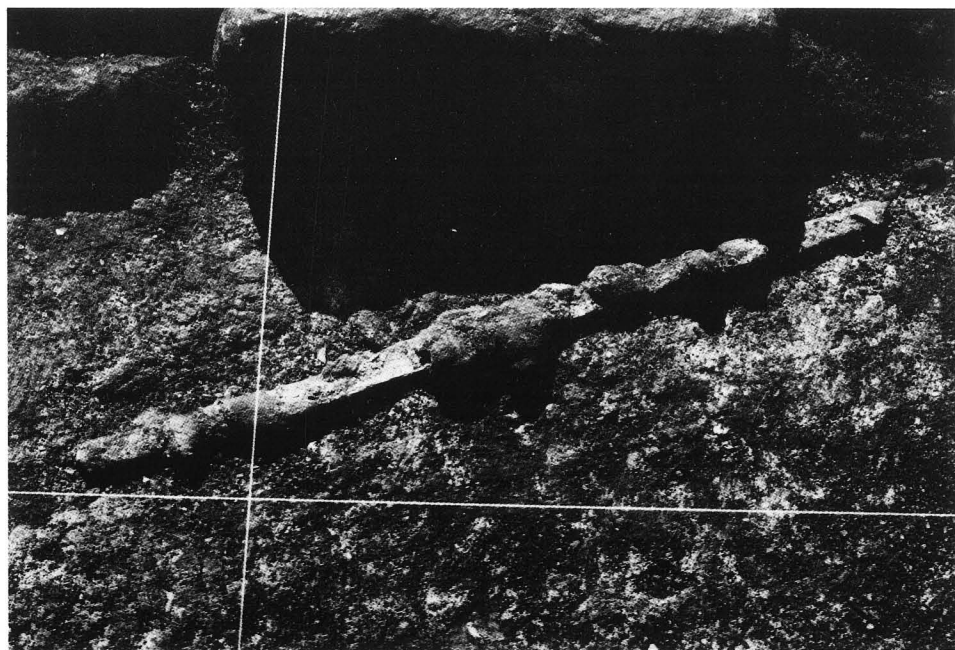
図版 3 周溝内の土器出土状況



図版 4
周溝内の高杯出土状況



図版 5
主体部



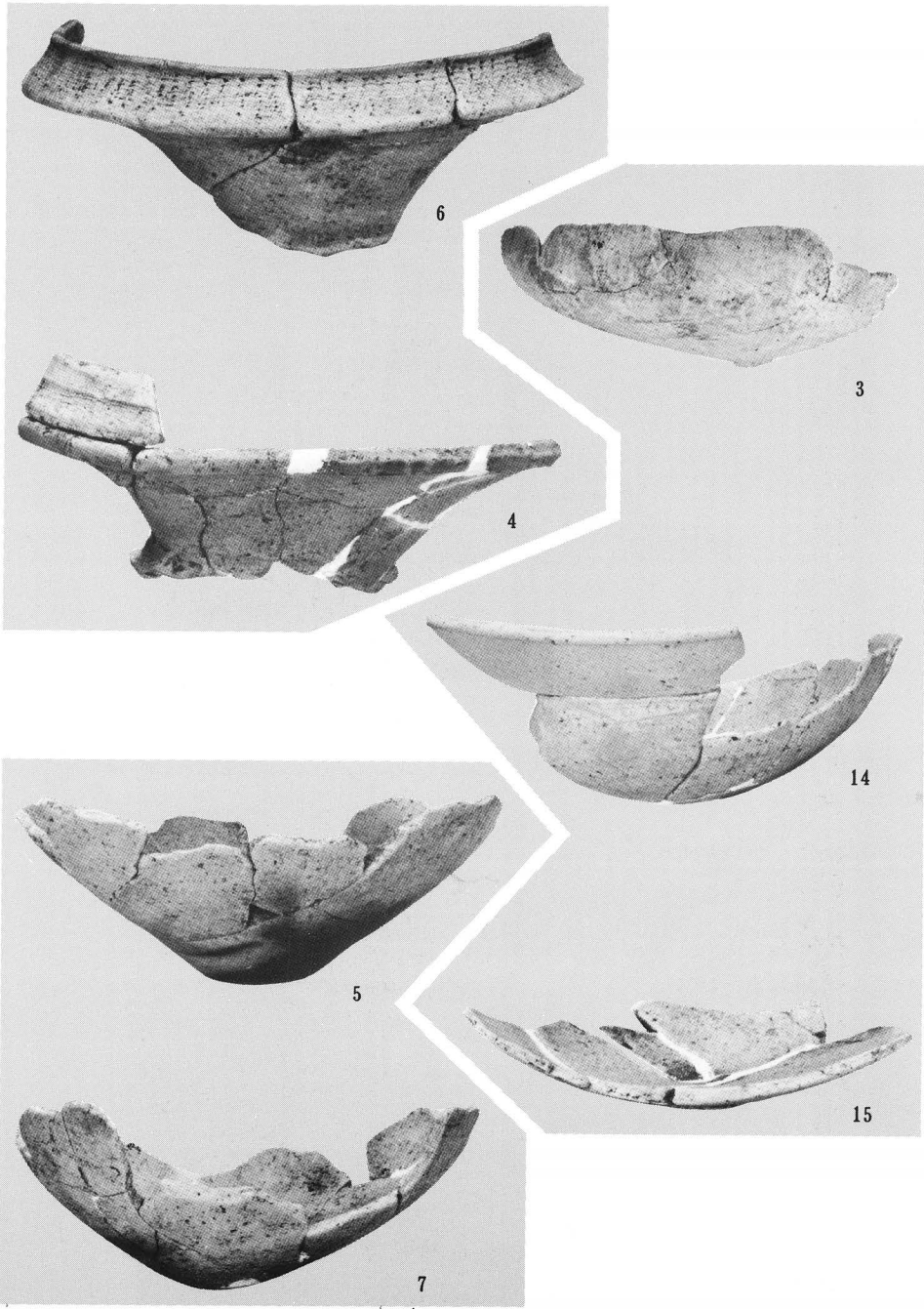
図版 6
出土遺物 (1)



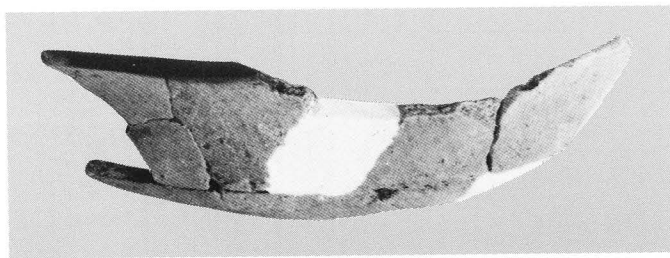
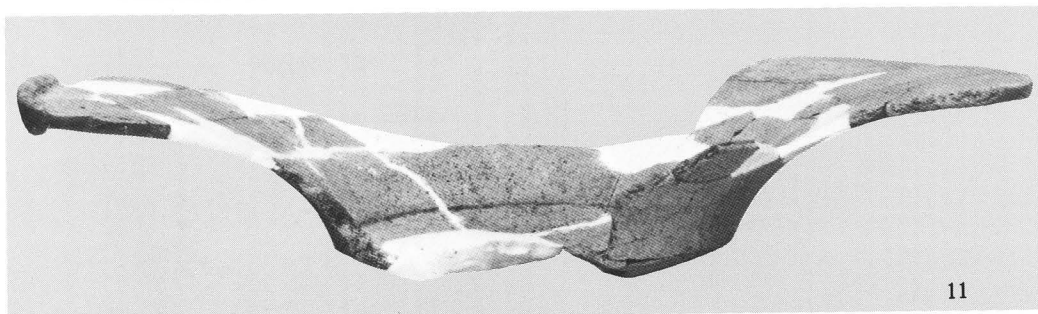
第10図



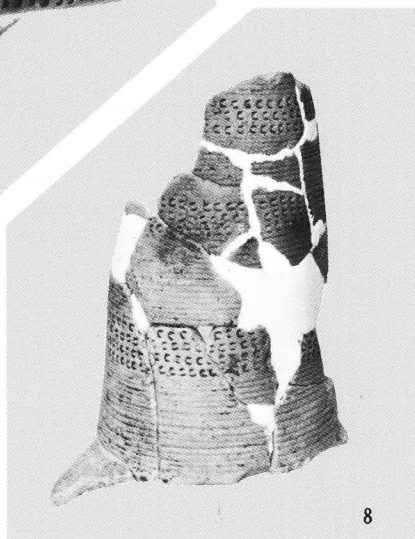
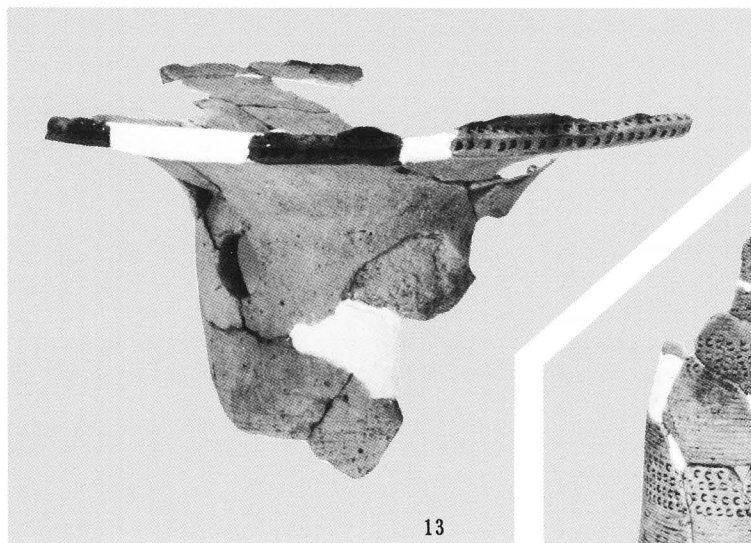
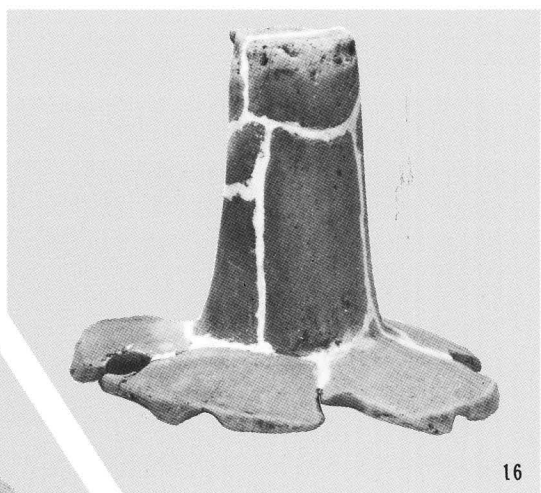
図版 7
出土遺物(2)



図版 8
出土遺物(3)



図版 9 出土遺物(4)





九塚地下式横穴墓群

KOKONOTUZUKA

例 言

1. 本報告は、昭和58年度に、県教育委員会が実施した九塚地下式横穴墓群発掘調査の成果である。
2. 調査は、文化課主事北郷泰道が担当した。
3. 本報告の編集・執筆などすべては、北郷が担当した。
4. 本調査で出土した遺物は、埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

1. 調査の経緯	29
2. 遺跡の位置と環境	29
3. 調査の結果	
1号地下式横穴墓	32
2号地下式横穴墓	32
3号地下式横穴墓	38
4. ま と め	38

挿 図 目 次

第1図 九塚地下式横穴墓位置図	30
第2図 九塚地下式横穴墓分布図	31
第3図 1号地下式横穴墓実測図	34
第4図 2号地下式横穴墓実測図	35
第5図 2号地下式横穴墓出土副葬品実測図	36
第6図 3号地下式横穴墓実測図	37
第7図 3号地下式横穴墓出土副葬品実測図	38

図 版 目 次

図版 1	2号地下式横穴墓壁面彩色／ 3号地下式横穴墓壁面塗「朱」……………	41
図版 2	九塚地下式横穴墓群遠景／全景……………	42
図版 3	九塚地下式横穴墓群近景／ 1号地下式横穴墓竪坑検出状況……………	43
図版 4	1号地下式横穴墓竪坑断面／閉塞石状態……………	44
図版 5	1号地下式横穴墓閉塞石状態／竪坑全景……………	45
図版 6	1号地下式横穴墓壁面調整痕／ 2号地下式横穴墓玄室全景……………	46
図版 7	2号地下式横穴墓副葬品・頭骨検出状態／ 鉄鏝検出状態……………	47
図版 8	2号地下式横穴墓壁面彩色／竪坑・羨門……………	48
図版 9	3号地下式横穴墓全景……………	49
図版 10	3号地下式横穴墓直刀検出状態／ 張り床と床面調整痕……………	50
図版 11	3号地下式横穴墓床面調整痕／壁面調整痕……………	51
図版 12	3号地下式横穴墓壁面調整痕／ 大萩地下式横穴墓群南土層断面近況……………	52
図版 13	2号・3号地下式横穴墓出土副葬品……………	53

1. 調査の経緯

西諸県農林振興局が実施する圃場整備事業に伴い、西諸県郡野尻町大字東麓2514—6、2528—2において、数基の地下式横穴墓が発見されたとの連絡があり、県文化課では昭和58年6月15日に、主任主事面高哲郎を現地確認に派遣すると共に、緊急発掘調査の調整に入った。その結果、3基の地下式横穴墓が確認され、同月21日に西諸県農林振興局長から文化庁長官あて、発見通知が提出され、8月12日に県文化課に調査依頼がなされた。それを受けて文化課は、周辺地の新たな地下式横穴墓の確認も含め、当初8月15日から9月2日までの予定で発掘調査通知を提出した。

発掘調査には、文化課主事北郷泰道が当たり、実際の調査には16日から着手し、事業区域内に新たに地下式横穴墓が発見されなかったことから、25日には調査を終了することができた。

2. 遺跡の位置と環境

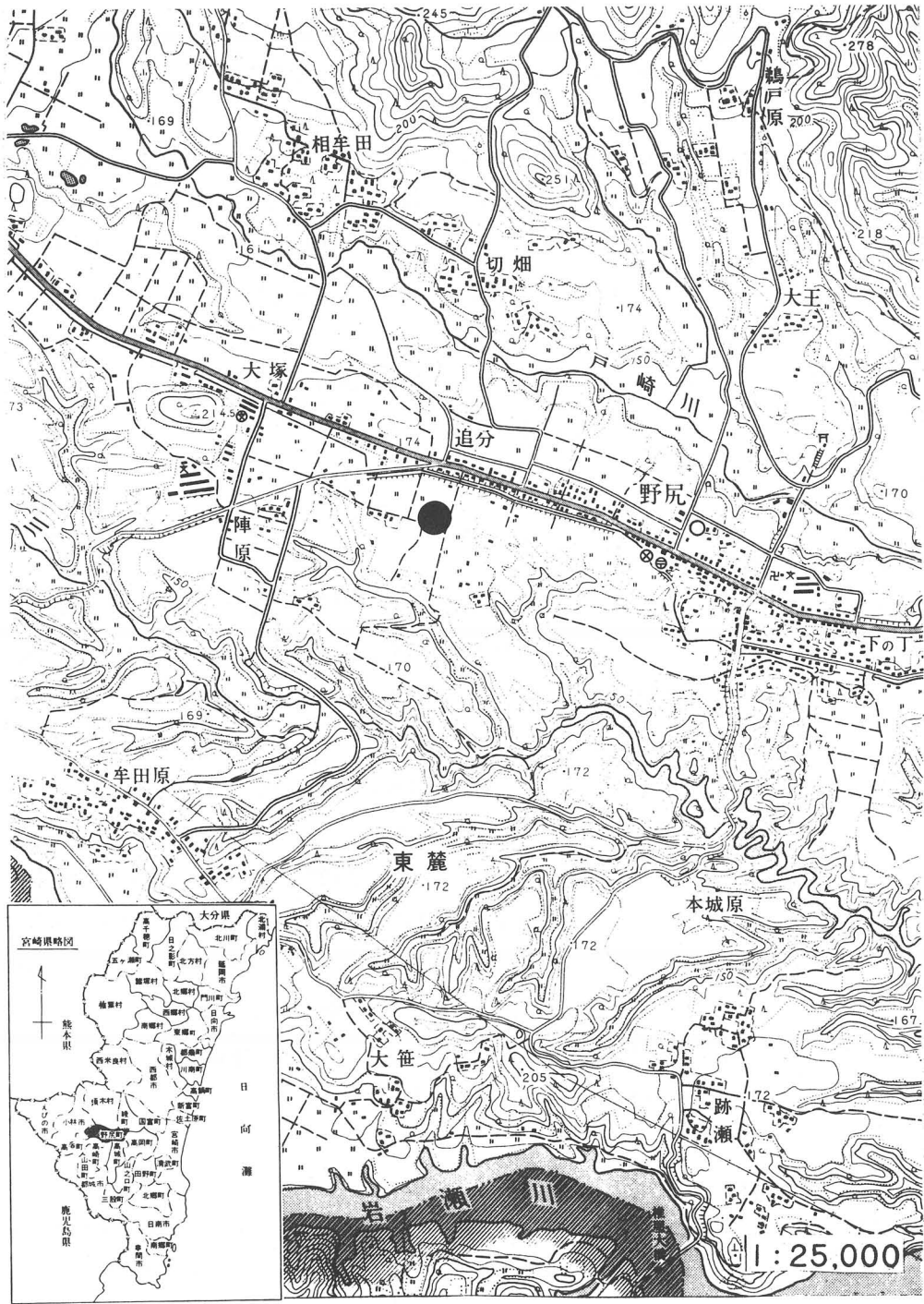
九塚地下式横穴墓群は、国道268号が小林方面と高原方面に分岐する手前の、国道の南に接する地域に分布する。標高170mにあたり、東方向と南方向に比高差約10m以上の谷が囲む。現況ではほぼ平坦な地形にならされているが、後述するように本来はより起伏に富んだ地形をなしていた事が知られる。

今回調査の対象となった地下式横穴墓とわずか数米の農道を挟む南方には、県指定野尻古墳1号墳が所在する。これは、円墳としての指定であるが、墳丘下には地下式横穴墓が存在することが知られている。さらに、野尻町における指定古墳は2基のみで、その一つは全く地理的に離れた大字三ヶ野山字大萩に所在し、昭和49年に調査された大萩地下式横穴墓群の⁽¹⁾一つがそれにあたる。約6km離れた二つの地下式横穴墓群は全く別個の群として扱われるが、成り立ちを考える上で多くの共通点で結ぶことが出来るものである。

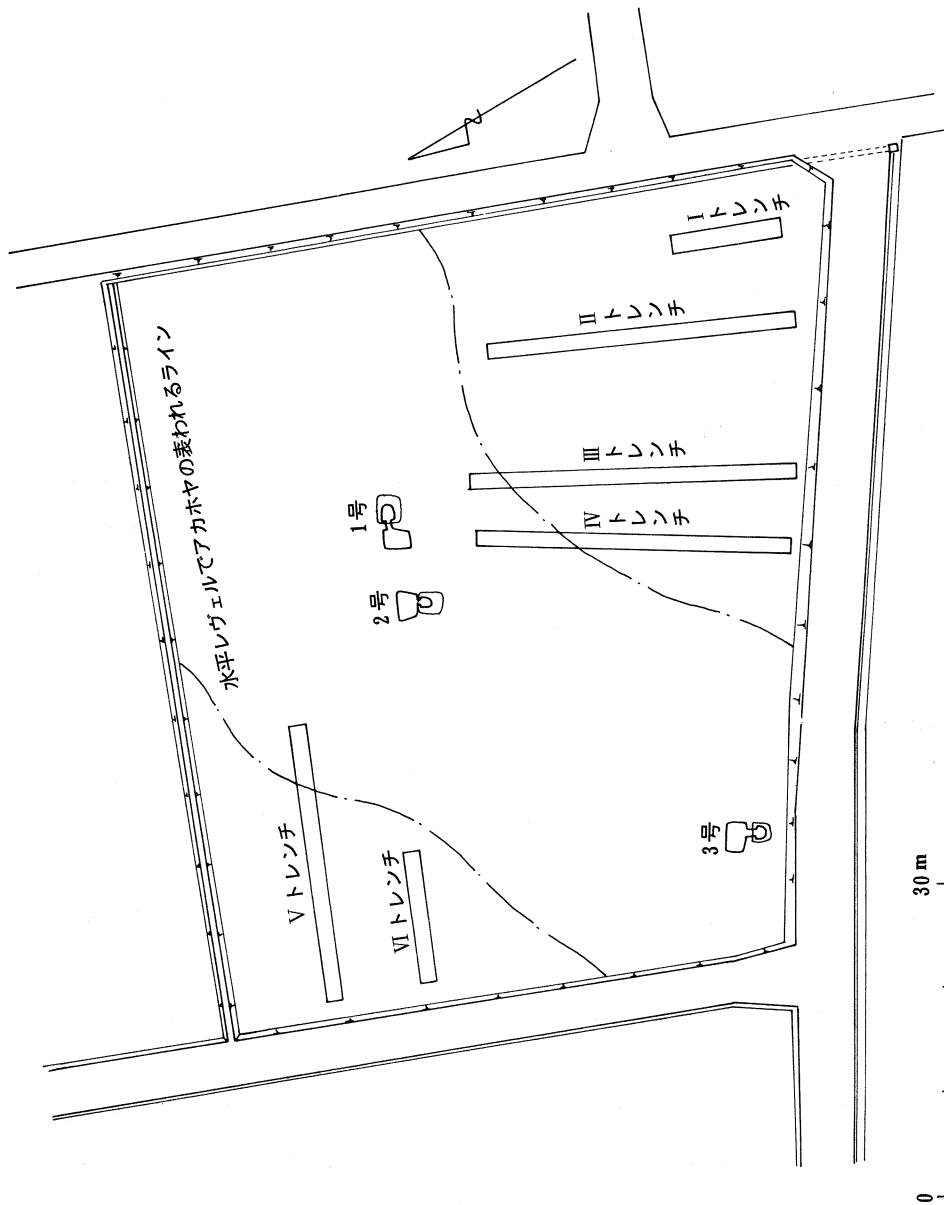
そのほか、大字東麓字切畑⁽²⁾でも地下式横穴墓が発見されており、隣接する高原町、小林市などと共に、西諸県地方特有の地下式横穴墓を形成している。

3. 調査の結果

3基の地下式横穴墓は、東から1号とし、西に約6mに2号、2号の南西約40mに3号が位置する。1号は西に玄室を向け、2号は北東に、3号も北東にそれぞれ方位している。



第1図 九塚地下式横穴墓群位置図



第2図 九塚地下式横穴墓群分布図

1号地下式横穴墓

竪坑～玄室をほぼ東～西に構築した、平入り型の地下式横穴墓である。天井部は切妻の屋根形を成し、左片袖を基本とするが、わずかに右袖にも掘り込みが認められる。又、天井部の崩落のためその全体は明らかでないが、奥壁に棚状施設が設けられている。竪坑、玄室ともにややいびつに梯形をなし、竪坑上部で、 $100\sim 130\times 150\text{ cm}$ 、玄室で $160\times 150\sim 180\text{ cm}$ を計る。また羨門部の天井の高さは、最高部で 150 cm を計る。一方、羨門の閉塞は長軸 $50\sim 60\text{ cm}$ 大の河原石による乱積みである。

床面は整った平坦面を作らず、羨門部から玄室にかけて最深部では 10 cm ほど窪みがつけられ、その上には張り床状に硬質の褐色土が認められた。また、壁面の掘削・調整は奥壁部で幅 10 cm 弱のU字形鍬先および 10 cm 以上の幅があると思われる鉄製工具で、その外の壁面にはU字形の痕跡は認められず、幅 5 cm 程度の手斧でややラフな痕跡を残しながらも、全体的には比較的丁寧に作られている。

副葬品は見受けられなかったが、玄室の奥壁北側に朱の散布面が認められた。

2号地下式横穴墓

竪坑～玄室を南西～北東に向けた、平入り型の地下式横穴墓である。切妻の家形を作るが、天井部崩落のため全体は不明であるが側壁でみるところ天井は稜を成さず、カマボコ形を成していたものと思われる。また、1号地下式横穴墓と同様に、左片袖であるが、わずかに右袖への掘り込みもみられる。竪坑の掘り込みは大きく $140\sim 180\times 220\text{ cm}$ 、竪坑床面は $55\sim 75\times 95\text{ cm}$ を計る。玄室は $150\sim 190\times 160\sim 170\text{ cm}$ の広さで、天井の高さは右壁最高部で 95 cm を計る。奥壁および左・右壁には幅は一定しないが、確認できる最も幅の広い部分で 12 cm を計る棚状施設が設けられている。

本地下式横穴墓もことに羨道部付近で床面が深くなり平坦ではない。床面のほぼ全体にシラスがみられその上は、張り床状に固められている。しかし、壁面の掘削・調整は1号程には明瞭ではなく、わずかに左壁において 5 cm 程度の手斧による奥壁にむかう跡がみとめられる。それに対し、右壁面にはハケでなぐり描いたような朱の面が残され、奥壁にも一部朱の濃い塗布がみられる。

副葬品は、玄室の奥壁寄り、ほぼ中央、そして羨門側の三箇所にわかれ、床面上にも奥壁寄りとはほぼ中央に朱の面が認められることから、少なくとも二体ないしは三体の埋葬が考えられる。奥壁よりの副葬品は、鉄鍬 $4\sim 6$ 本、中央付近にはややこぶりの剣、そして直刀、

さらに右壁よりに数本の鉄鏃と剣、左片袖の部分に4本以上の鉄鏃がそれぞれ配置されていた。ただしこの内、奥壁の鉄鏃と右壁の鉄鏃と剣はおのおのそれぞれの上方面にある棚状施設から転落したものと考えられる。

出土した副葬品は、直刀1、鉄剣2、刀子4、鉄鏃10以上、鈍1などである。

直刀（第5図1・2）

1は、60cm以上の長さがあったと推定される直刀である。柄部には0.2cm内外の麻紐状の紐による巻きが一部残されていた。また、目釘穴は2箇所確認されている。身幅は、関寄りで2.7cm、鋒寄りで2.5cmを、背幅は0.7cmを測る。

2は、直刀の柄部であり、現存長は12.3cmを測る。また、柄の断面は楕円状を呈し、長軸2.2cm、短軸1.9cmである。

剣（第5図3～5）

3は、現存長37.7cmを測る鏃の通った短剣で、コブ状の鏃が付いているにもかかわらず地はしっかり遺存している。身の中ほどで、身幅2.5cm、厚さ0.6cm、鋒は欠損しているが鋒寄りで身幅2.2cm、厚さ0.5cmである。

4・5は同一個体で、全体長は40cm以上になると考えられる、鏃のない剣である。柄部には麻紐状の糸巻きが比較的良く残存し、断面楕円形を呈する長軸は2.3cm、短軸は1.8cmを測る。鹿角装が装備されていたとみられるが、わずかにその痕跡をとどめるにすぎない。身幅は3.1cm、厚さは0.6cmである。

刀子（第5図6～9）

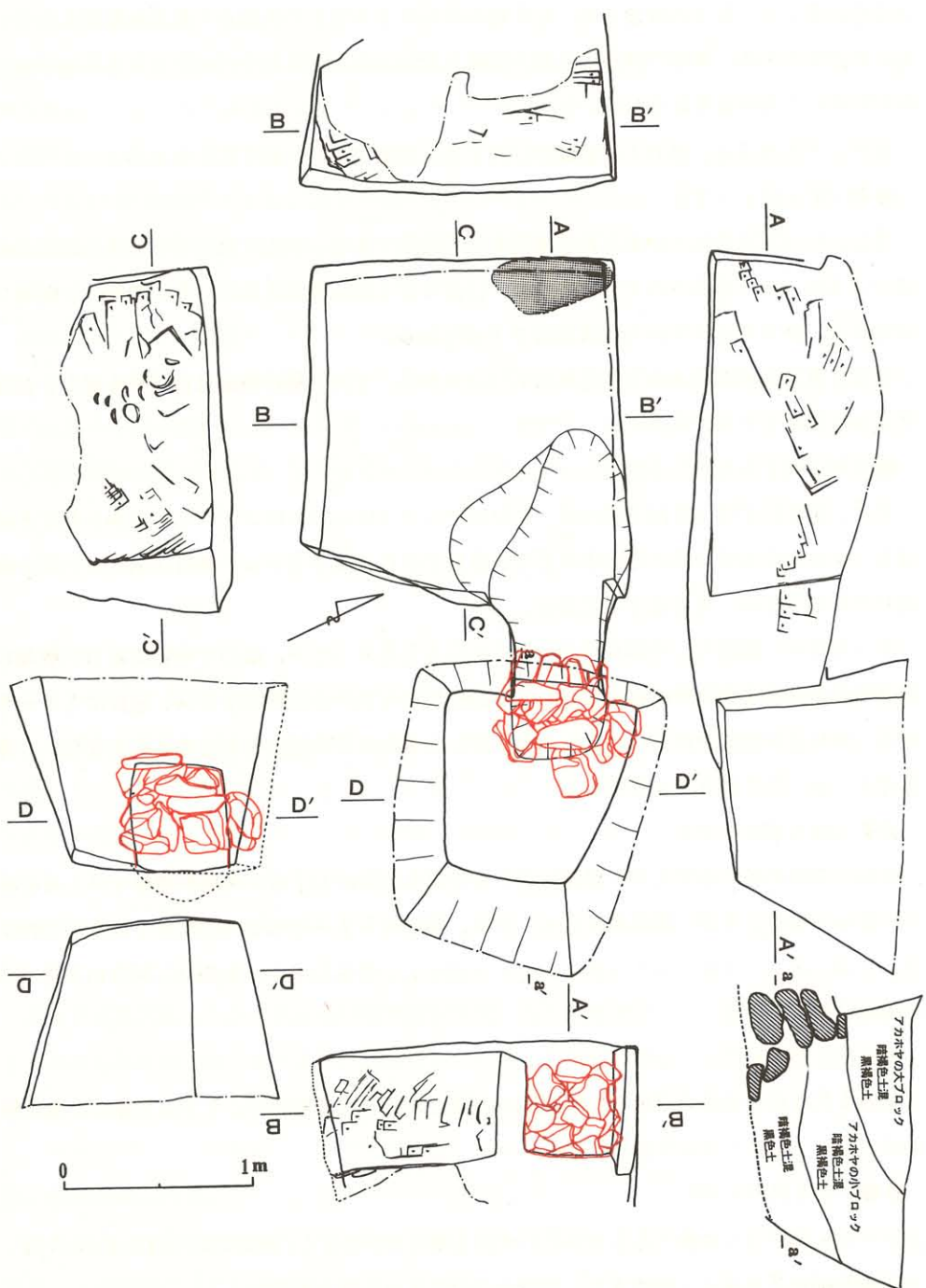
6は、刃部の多くを欠くが、現存長3.9cmを測る小型の刀子で、角柄が遺存する。背の厚さ0.2cmである。7は、現存長8.0cm、8は、現存長7.2cmのほぼ同じ大きさのもので背厚は0.3cmである。9は、やや大きく、8.7cm遺存し、背幅も0.4cmを測り、切り出し部での身幅は2.0cmである。

鈍（第5図10）

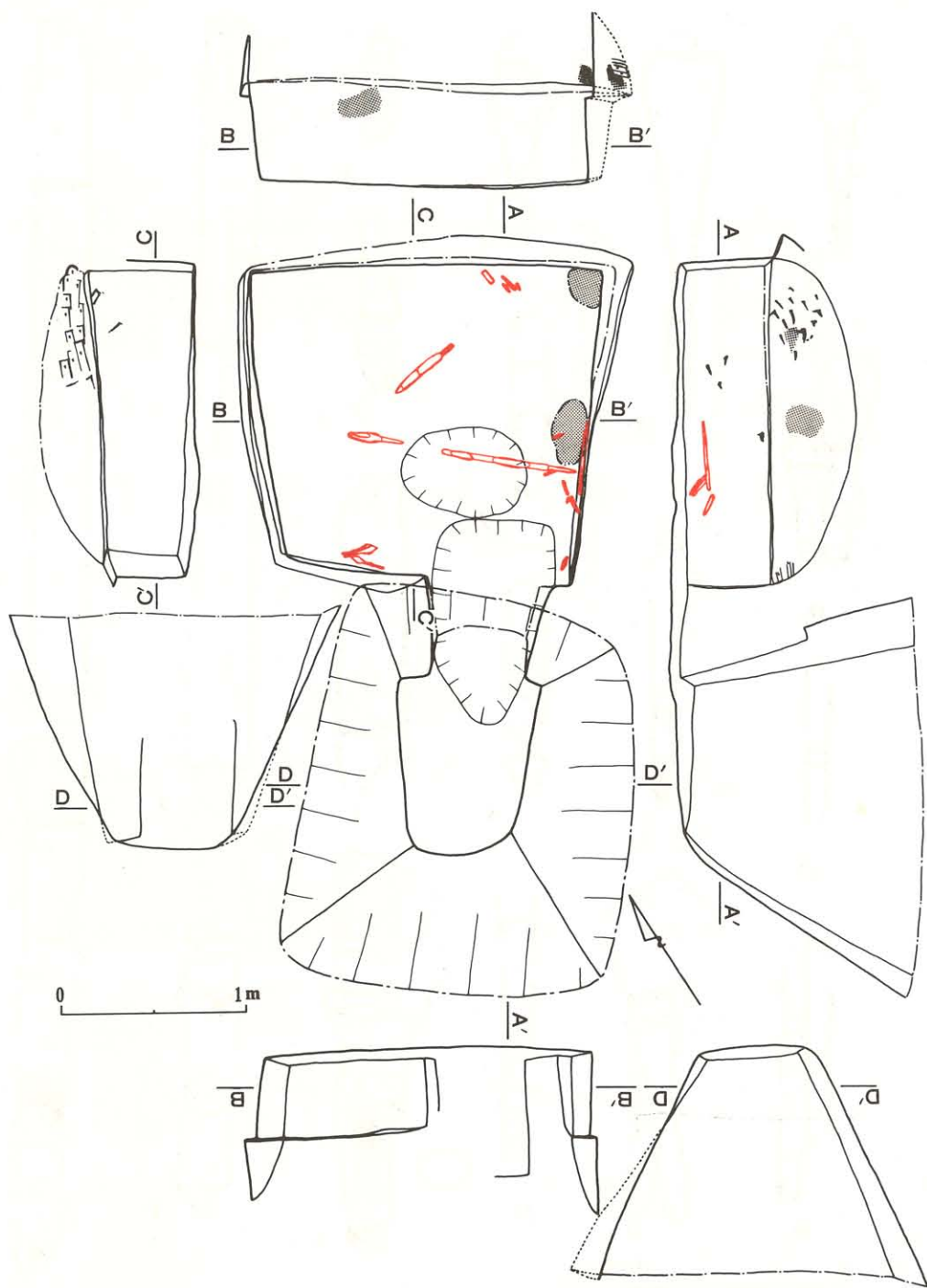
刃部を欠くが、柄部の状態及び断面形から鈍と判断されるもので、7.7cmを遺存する。柄の幅1.9cm、厚さ1.3cmを測る。

鉄鏃（第5図11～18）

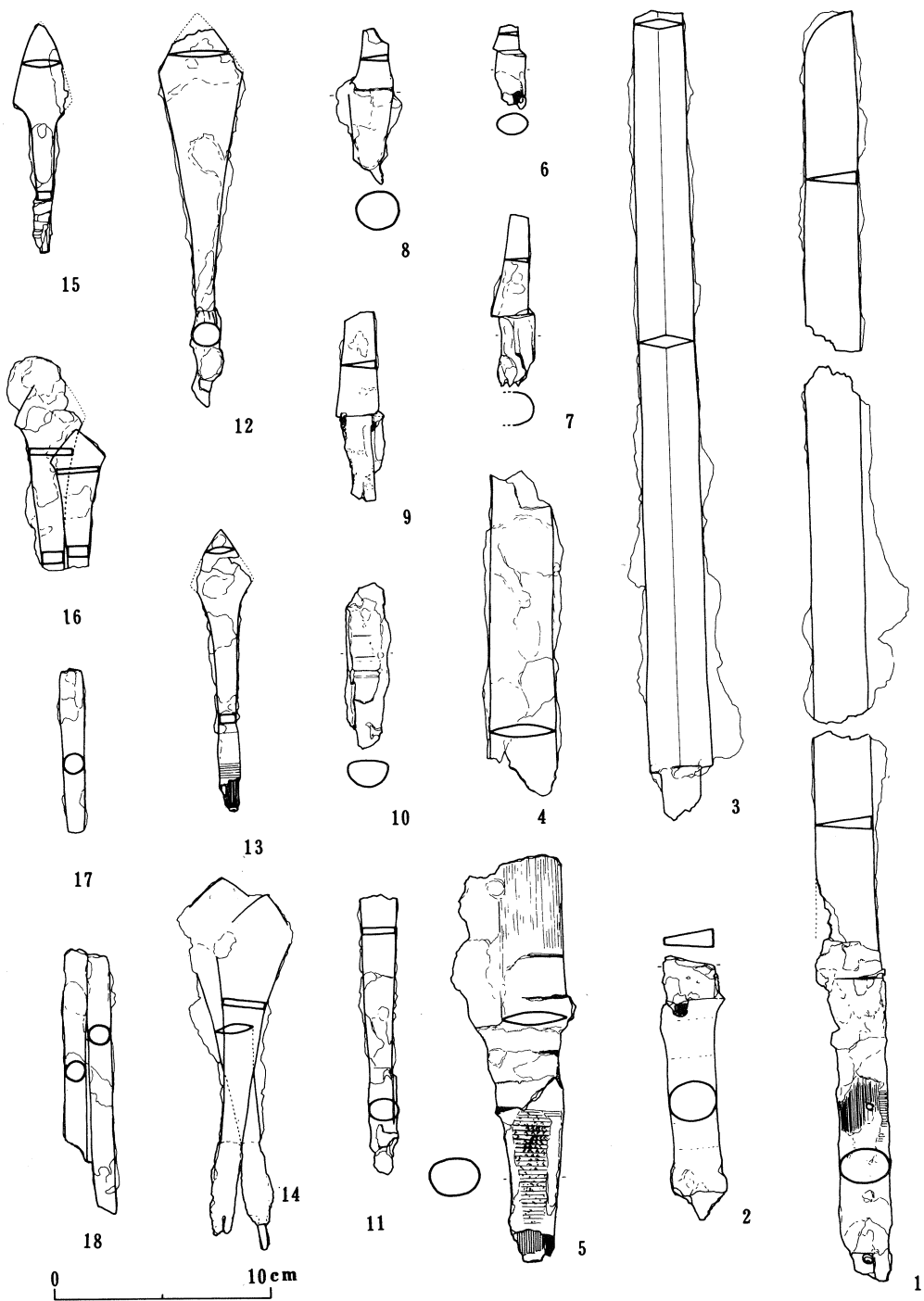
すべて三角形の鉄鏃とみられる。いずれも鏃付きがひどく、原形の復元はむずかしいが、12が鏃身幅が3.9cmと一番大きく、16の一つが2.5cmと最も小さい。



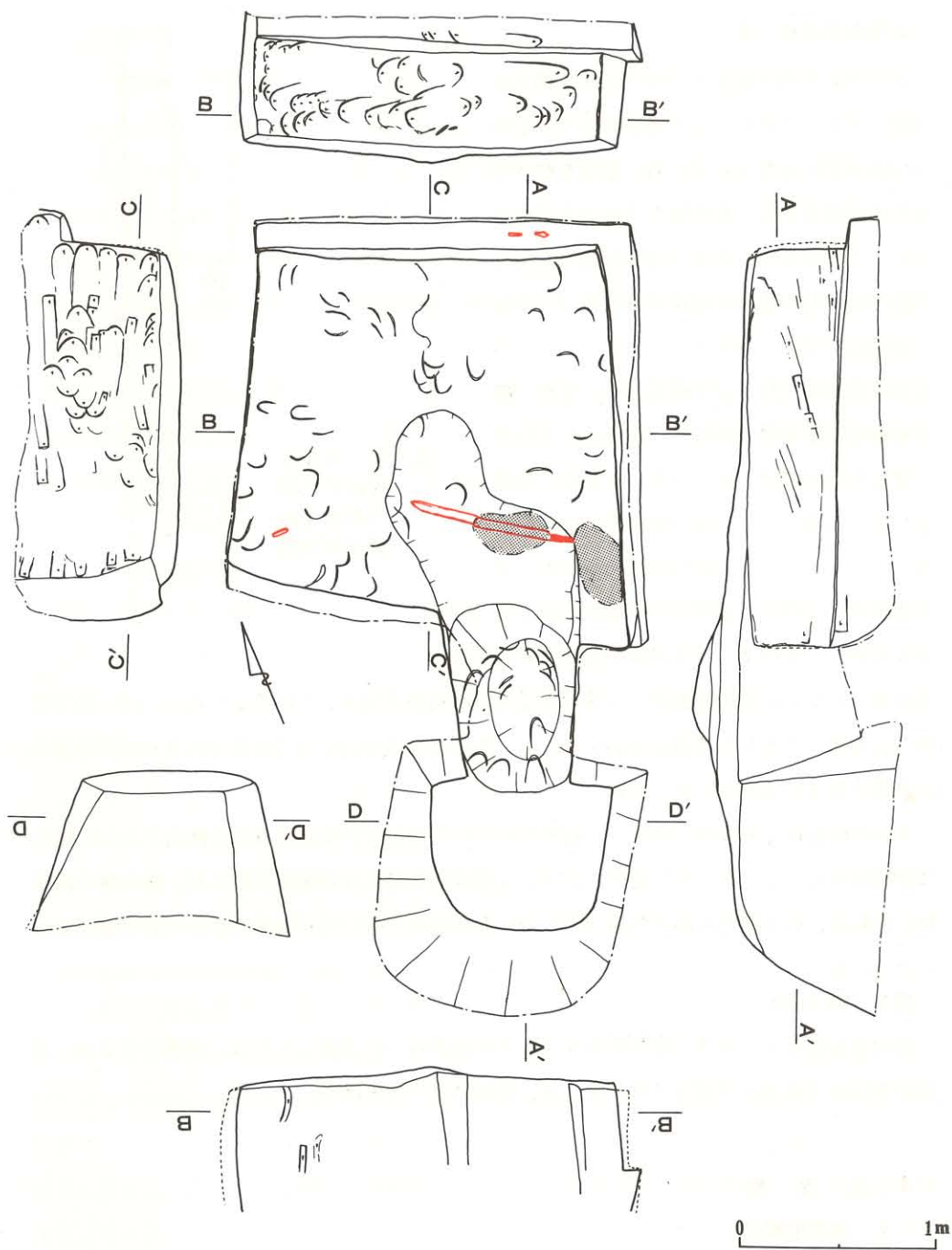
第3図 1号地下式横穴墓



第4图 九塚2号地下式横穴墓实测图



第5图 九塚2号地下式横穴墓出土副葬品实测图



第 6 图 九塚 3 号地下式横穴墓实测图

3号地下式横穴墓

2号と似た方向性をもつ地下式横穴墓であるが、ことに2号に比して竪坑が小さく120×140cmの片丸を呈している。家形をなす平入りの構造であり、左片袖を基本としているが、ここでの右袖への掘り込みは前二者より明瞭で25cm程の袖部が形作られている。玄室の規模は、170×160～200cmで、1・2号より羨道がやや長い点で眼をひく。また、棚状施設は左壁を除く各壁に、幅15cmときわめて整った形で設けられている。そして、羨道部における掘り込みも深く最深部で20cmを計り、さらにここでは床面への幅10cm程のU字形鋤先による掘削・調整の跡が極めて良く残されていた。その上には5cm弱の張り床状の

面があったが、床面の調整がはっきりと認められた例は初めてといえるだろう。同じU字形鋤先は奥壁、左壁にも痕跡が認められたが、右壁にのみそれはなくかすかに5cm弱の手斧の跡が残されているだけであった。

3号は最も長く天井部が陥没し、放置されていたらしく、羨道よりから検出された副葬品は発掘時直刀と見られたが、錆付きがひどく実測にも耐えない状態であった。検出時の観察からすれば、85cm程度の長さがあったものとみられる。そして、周辺には朱の散布面が認められている。

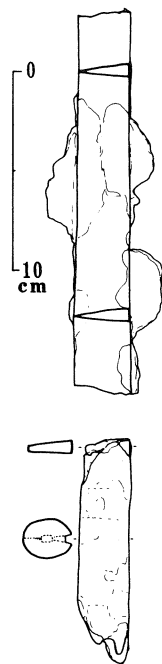
直刀（第7図）

錆付きが著しく、すでに全体形を知ることは出来ない。実測したのは、柄部の11.2cm、刃部の19.3cmである。身幅は2.6～2.7cm、背幅は0.7cmを測る。

4. ま と め

I 自然的要因

調査では、周辺地での新たな地下式横穴墓の発見・確認を目指して、周囲6箇所にトレンチを設定した結果、新たな地下式横穴墓の発見はなかったものの、地形上の選地に関して興



第7図 九塚3号地下式横穴墓出土副葬品実測図

味ある所見を得る事ができた。すなわち、ほぼ平坦なレベルで耕作土および黒色土を剥いたところ、黒色土下に現れるアカホヤ層のレベルに高低差が認められ、その範囲は第30図に示す所である。それによれば、3基の地下式横穴墓の検出された地点は、アカホヤ層の起伏からすると高い部分に相当し、現地表では一見平坦に見える中、地下式横穴墓築造時期には緩やかではあれ丘陵状の場所にあたっていたと考えられる。そのような地形の起伏は、やはり大萩地下式横穴墓群の周辺においても、図版12に見るように認める事ができる。また、高原町日守地下式横穴墓群⁽³⁾においても地下式横穴墓の築造に地形的要因が大きく関与していたであろうことは指摘される。

野尻町の2基の指定古墳はいずれも円墳であり、しかし地下式横穴墓がその主体部であることは確実である。そうした円墳を目指しているのになにに係わらず、地形の高みを目指して地下式横穴墓が占地したのであることはほぼ間違いあるまい。

II 築造方法

地下式横穴墓は、地下に穿たれた空洞の墓室である。したがって、築造される場所の地質は遺構の遺存に大きく関係してくる。都城地方では、ボラ層と呼ばれる火山起源の層が、地下式横穴墓の構造を不明瞭にしている。あるいは、えびの地方では、玄室の掘り込まれる砂礫層が床面のプランを曖昧にしている。

しかし、幸いにして小林、野尻両盆地を中心とした地域では、アカホヤ層下のいわゆる「カシワバン」と呼ばれる厚い硬質土層に玄室が構築されるため、地下式横穴墓の内部構造はおろか墓室を穿った調整の跡が明瞭に残されることになる。そうした壁面に残された調整痕に着目し、その記録化と図化を本格的に試みたのは岩永哲夫であったが、今回の調査では、さらに床面での調整を確実に捉えることが出来た。それと共に、床面上の張り床状の部分についても、一考を要する必要がでてきた。

まず、ことには3号地下式横穴墓で明らかであるが、羨道部の床がとりわけ深く掘り込まれている事の理由付けである。一番に、地下式横穴墓構築時において、構築者たちの有効な作業スペースとして天井高の低い羨道部が頭のつかえぬ程度にとりあえず深掘りされたことが考えられる。そして、被葬者の埋葬時において納めやすい様に掘り窪められたものが、埋葬完了後に床が正式に張られたとも考える事ができる。いずれにしても、床面は平坦に整形されていたのではなく、かなり粗く掘削され、埋葬時に張り床により床面を整えていたことが知られる。

Ⅲ 赤の葬送

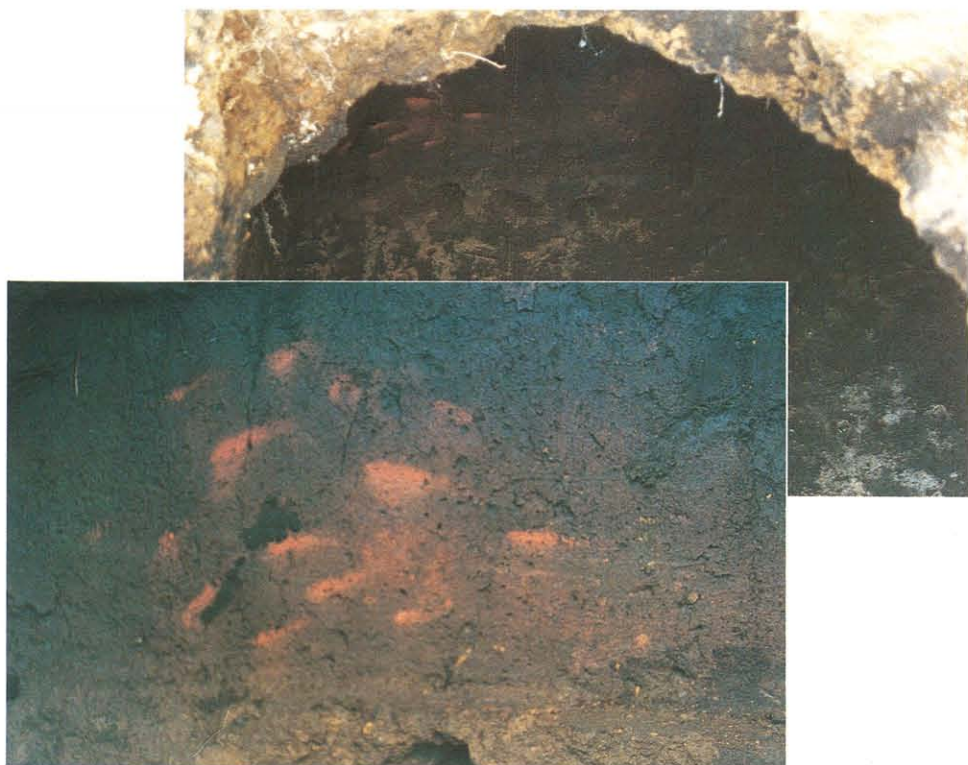
2号および3号には、いわゆるベンガラによる壁面彩色が見られた。3号のそれは、四周の全体を赤色に塗り、また羨門入口を塗り、さらにその床からは小さな「朱玉」が検出された。2号には、極一部にはあるが、全く無意識とは考えられない短線文風の彩色がみられた。高原町の旭台地下式横穴墓⁽⁵⁾で一定の意匠をもった彩色が確認されて以降、次々に同様の彩色が発見されている。しかし、いずれも旭台ほどには明瞭なものではない。やはり、今回の2号もそうであり、何を表現しようとしているものか、ように理解し難い。ただ、これまでのものは玄室を「家形」に表現することの属性の範囲に留まっていた。それは、旭台の彩色の場合もそうであり、小林市下ノ平地下式横穴墓にみられた線刻の場合も同様の事がいえる。一見意味不明に見える一連の彩色が、そのような「家形」の属性から離れどこまで「装飾」の域に達しようとしたものか一考を要する。

Ⅳ 築造年代

築造の年代としては、同じ野尻町の大萩地下式横穴墓群に対して先行する時期が与えられようと思われる。そして、高原町の日守、旭台地下式横穴墓群との併行関係が考えられる。おもには、内部構造が根拠となるが、大萩ではプランにばらつきが生じ、ここにもみられたプランはみられない。一方、旭台では両袖および寄せ棟造りがみられたが、九塚で見られないのは群内での3基という限られた数量によるものかは、なお調査例の増加がまたれる。ここでは、5世紀末から6世紀初頭の時期を与えておきたいとおもう。

注

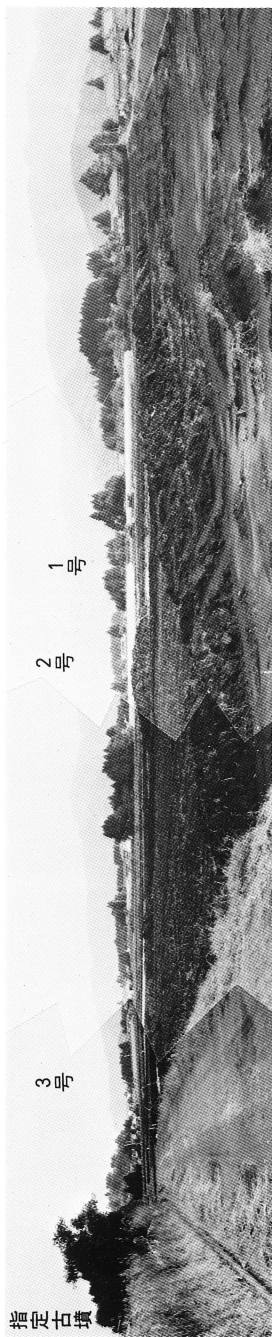
- (1) 石川恒太郎・田中茂ほか「大萩遺跡(1)」 1974年宮崎県教育委員会
- (2) 石川恒太郎「切畑地下式古墳発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』第20集 1978年 宮崎県教育委員会
- (3) a 茂山護ほか「日守地下式横穴(古墳)54-1~4号発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』第22集 1980年 宮崎県教育委員会
b 岩永哲夫ほか「日守地下式古墳群55-1~4号発掘調査」同上、第23集 1981年
- (4) 岩永哲夫「上ノ原地下式古墳群1~10号発掘調査」(3)のbに同じ。
- (5) 石川恒太郎ほか「旭台地下式古墳群発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』第19集 1977年 宮崎県教育委員会



2号地下式横穴墓壁面彩色



3号地下式横穴墓壁面涂「朱」



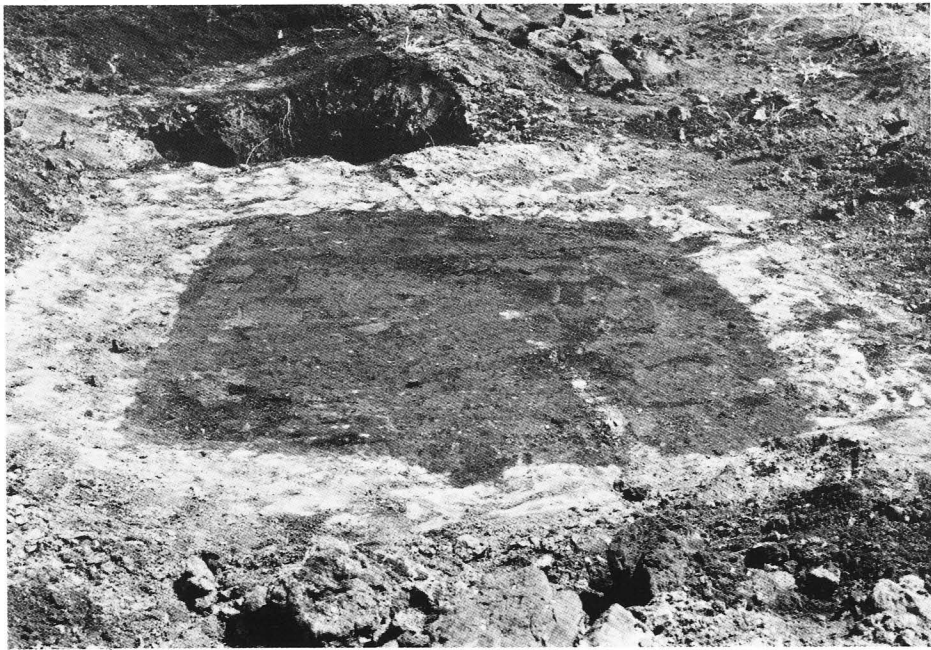
九塚地下式横穴墓群全景



九塚地下式横穴墓群遠景



九塚地下式横穴墓群近景



1号地下式横穴墓竖坑検出状況



1号地下式横穴墓竖坑断面図



1号地下式横穴墓閉塞石状態（羨門側から）



1号地下式横穴墓閉塞石状態（玄室内から）



1号地下式横穴墓竖坑全景



1号地下式横穴墓壁面調整痕



2号地下式横穴墓玄室全景



2号地下式横穴墓副葬品・頭骨検出状態



2号地下式横穴墓鉄鎌検出状態



2号地下式横穴墓壁面彩色



2号地下式横穴墓竖坑羨門



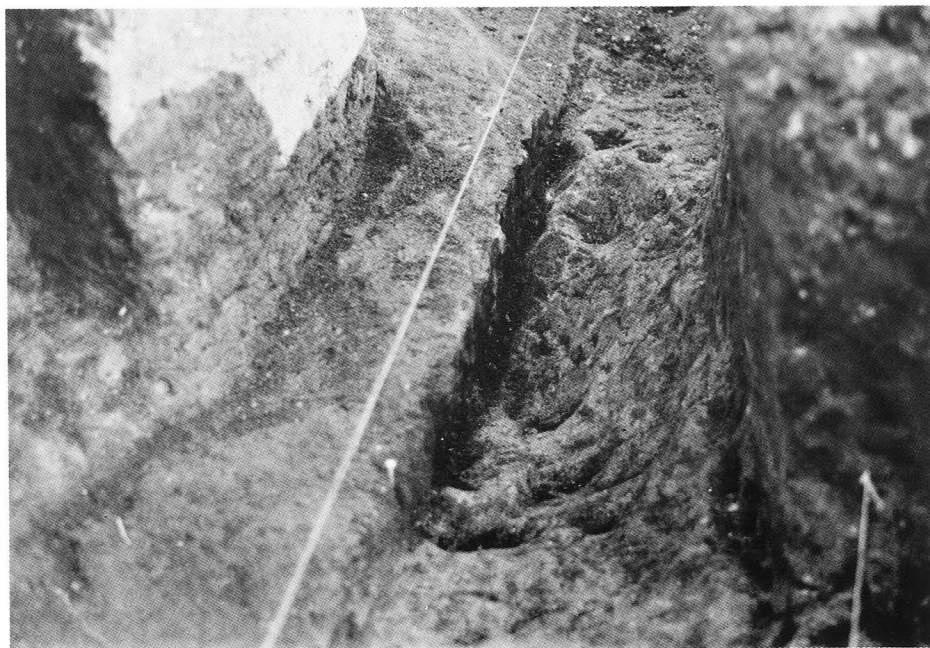
3号地下式横穴墓全景（玄室方向から）



3号地下式横穴墓全景（竖坑方向から）



3号地下式横穴墓直刀検出状態



3号地下式横穴墓張り床と床面調整痕



3号地下式横穴墓床面調整痕



3号地下式横穴墓壁面調整痕



3号地下式横穴墓壁面調整痕



大萩地下式横穴墓群南土層断面近況



2号・3号地下式横穴墓出土副葬品

石 神 遺 跡

ISI GAMI

例 言

1. 本報告は、宮崎県教育委員会が実施した石神遺跡確認調査報告である。
2. 発掘調査は昭和59年8月6日から8月10日まで実施し、下記の市町村教育委員会埋蔵文化財担当者が参加した。尚、発掘にあたっては文化課主事北郷泰道、同主事日高孝治、同主事近藤協が指導担当した。

記

齊藤三貴男 (佐土原町教育委員会)
吉留 伸也 (えびの市教育委員会)
河野 博彦 (串間市教育委員会)
篠原 弘二 (高原町教育委員会)
堂村 和秋 (三股町教育委員会)
井上 文秀 (高鍋町教育委員会)
広池 洋三 (高城町教育委員会)
三輪 義孝 (都農町教育委員会)

3. 本編の執筆・編集・遺物の実測・トレースは近藤が行なった。
4. 本調査で出土した遺物は、埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

1. 所在地	56
2. 調査の概要	56
3. 遺跡の位置と環境	57
4. 遺跡の層序	57
5. 遺物	59
(1) 土器	59
(2) 軽石製浮子	64
6. 結語	64

挿図目次

第1図 遺跡位置図	55
第2図 遺跡周辺および発掘区	56
第3図 土層断面図	58
第4図 遺物散布図	59
第5図 出土遺物実測図(1)	61
第6図 出土遺物実測図(2)	63
第7図 軽石製浮子	64
第8図 軽石製浮子	65
第9図 軽石製浮子	65

図版・表目次

図版 1	調査風景・遺物出土状況	69
図版 2	出土土器 1	70
図版 3	出土土器 2	71
図版 4	出土土器・軽石製浮子・軽石塊	72
表 1	弥生式土器観察表	68



第1図 石神遺跡位置図

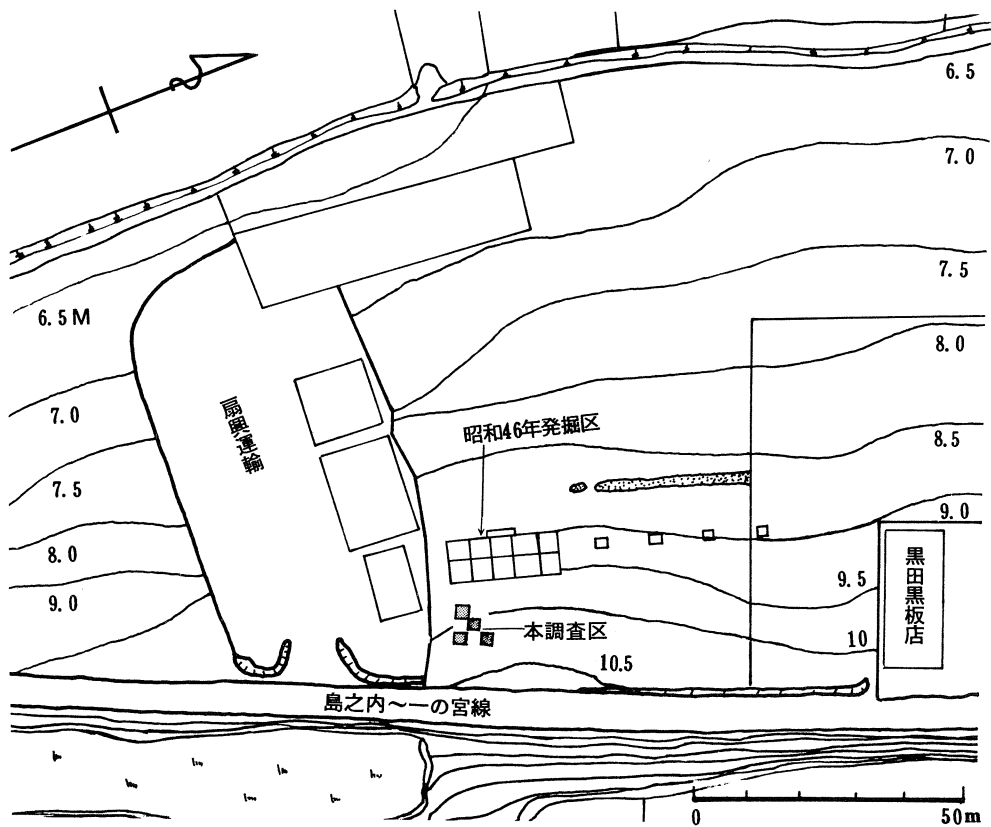
1. 所在地

宮崎市山崎町下原 975 - 1 番地 (児玉義久氏所有地)

今回調査した発掘区は宮崎市教育委員会によって昭和46年に発掘調査された発掘区から、東へ約30mの地点にあり、扇興運輸社屋のすぐ北隣り、県道大島～一の宮線の道路脇にあたる。

2. 調査の概要

調査は昭和59年8月6日に行なった調査区設定作業から、8月10日の埋めもどし作業までの5日間にわたって実施した。調査にあたっては2m×2mのグリッドを4ヶ所設定して、それぞれ北からA5、B6、C5、C7グリッドと呼称した。尚、今回の石神遺跡発掘調査は昭和45年7月に宮崎市教育委員会が緊急調査を行なって以来5度目の調査となる。



第2図 遺跡周辺および発掘区

3. 遺跡の位置と環境

鹿児島県曾於郡の山地に源を発し、都城盆地・野尻町・高崎町を経て、宮崎市のおぼ中央を貫流して日向灘に注ぐ大淀川は、その全長106kmに及ぶ流路の終着点において広範な沖積地を形成している。現在の河口には南北それぞれに砂嘴が形成され、砂嘴に沿って北に約4kmに及ぶラグーンがみられる。この砂嘴やラグーンは太古の昔から大淀川と日向灘からの沿岸流によって幾度か形造られており、大淀川の流路の変化にともなう河口の移動によって、その形成地も変化してきた。現在、その名残を留めるものとして、河口の北側に数列の砂丘をみることができる。

これらの砂丘は、そのなかに異なる歴史を内包して、地形等の自然環境の変遷と、人間の営みの復元に想いをはせると興味つきないものがある。石神遺跡はそうして形成された内陸から2番目の砂丘上にあり、現在の海岸線まで約1kmある。

最も内陸よりの第1砂丘(檣一大島砂丘)は、すでに縄文時代後期には形成されていたものと考えられるが、本格的に居住空間となったのは弥生時代に入ってからであって、本県の弥生時代遺跡において最古の足跡を留める檣遺跡はこの砂丘上にある。以来、現在に至るまで居住地として利用され続けてきている。石神遺跡の立地する第2砂丘上では、縄文時代の遺物は出土しておらず、その形成は縄文後期以降となろう。石神周辺の阿波岐ヶ原、新別府、村角、大島、浮の城等の各地区もまた弥生期の遺跡が多く散在する。その他、檣地区には前方後円墳をみることができる。

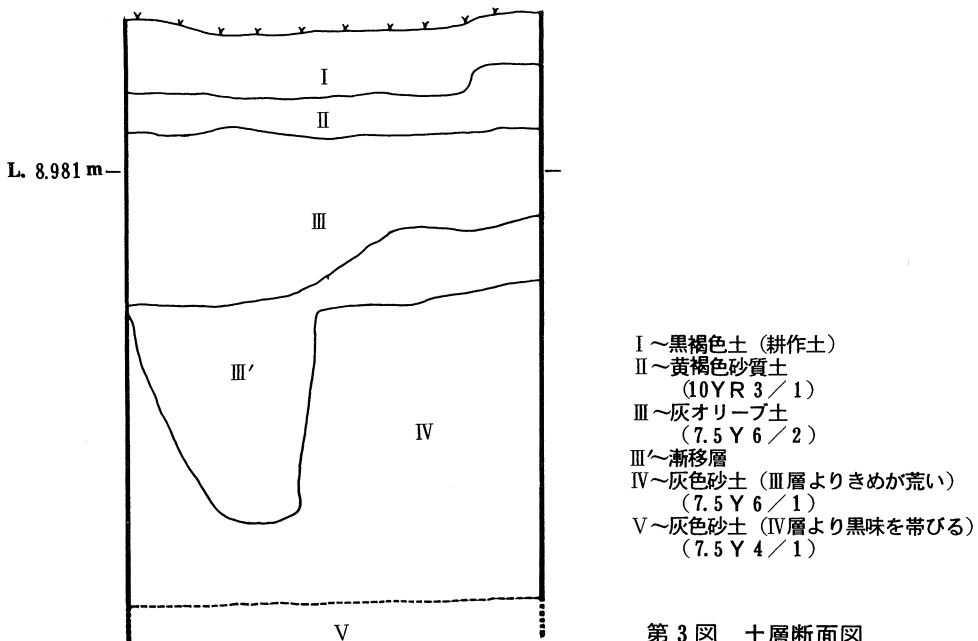
県教育委員会では昭和59年、60年の二度にわたってこの第1、第2砂丘一帯で分布調査を行なった。昭和59年実施の山崎町、阿波岐ヶ原町を中心とする第2砂丘の調査では弥生土器片の他、須恵器、土師器、土錘、中世陶器、輸入陶磁器等を表採し、昭和60年の村角町を中心とする第1砂丘上では、凹線文のある瀬戸内系の土器片や、鋤先口縁を有する壺形土器片等の弥生式土器、青磁稜花皿片等の輸入陶磁を表採した他、板状工具で器面調整し、網代底を有する縄文後、晩期の縄文土器底部を確認しており、第1、第2砂丘の形成時期差をうらずけている。

4. 遺跡の層序(図3)

本遺跡の基本的な層序は、A5グリッドを約1.8m掘り下げて観察した。周辺の表土はほぼ全域にわたって耕作による攪乱がみられるが、遺物包含層であるⅡ層においても同様に攪乱の程度は著しい。本遺跡は砂丘上にある遺跡であるから、その土壌は基本的には各層とも

砂であるが、砂粒の大小、無機・腐植質の混入の多少による土色の相異によって分別される。砂粒はⅠ層からⅢ層までは細砂（0.2～0.02mm）の範囲に含まれるが、下層になるにしたがって粒子が大きくなって粗砂となり、Ⅴ層では粒度、色調ともまったく海砂と変わらない。

- | | | |
|------|----------------------------|---|
| 第Ⅰ層 | 黒褐色耕作土 | 畑地の耕作土である。基本的には砂質であるが、腐植質の混入が多い土壌である。15～20cmの厚さではほぼ均一に堆積する。 |
| 第Ⅱ層 | 黄褐色砂質土
(10Y R 3 / 1) | 旧耕作土と考えられる。細砂であり、腐植質の混入も多く、塊状となりうる。植物根を含んでいる。遺物の包含層である。12～20cmの厚さで堆積する。 |
| 第Ⅲ層 | 灰オリーブ色砂質土
(7.5 Y 6 / 2) | 第Ⅱ層より粒子がやや大きくなり、オリーブ色が強くなる。30～50cmの厚さで堆積する。 |
| 第Ⅲ'層 | | 漸移層である。 |
| 第Ⅳ層 | 灰色砂土
(7.5 Y 6 / 1) | 第Ⅲ層に比較してより粒子が粗くなり、全くの砂層である。 |
| 第Ⅴ層 | 灰色砂土
(7.5 Y 4 / 1) | さらに粒子が粗くなり、Ⅳ層より黒味を帯びた色調となる。 |



第3図 土層断面図

5. 遺物

今回の確認調査では遺構の検出をみなかったが、306点の弥生式土器をはじめ、数点の軽石製品の出土をみている。土器は細破片がほとんどで、完形に近く復元できたものはなく図示できたものも極わずかであった。器形としては甕・壺・鉢形土器が考えられ、甕の出土率が高い。

(1) 土器

① 下城式系甕 (5 図 1、2)

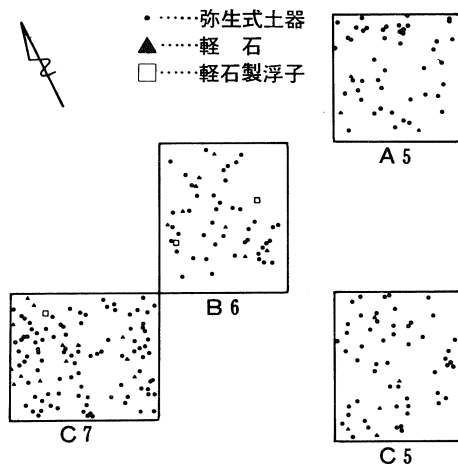
1. 口径26.2cm、器厚6.0mmいわゆる

下城式甕で、胴上半部が軽く内湾し、刻目突帯を境に急に外反する。口縁端は平坦で外傾している。刻目突帯は口縁下1.7cmのところのところに一条めぐり、断面三角形をなして比較的高い。刻目は丁寧に深く、縦に施される。色調は外面、にぶい赤褐色 (Hue 5 YR 5/4)、内面、にぶい橙色 (Hue 5 YR 6/4) を呈し、外面には煤が付着する。胎土に若干の砂粒とやや大粒の石英をみ、角閃石を極わずか含んでいる。焼成は堅緻で、保存よく風化はほとんどみられない。内面ナデ調整、外面突帯上部・直下はヨコナデ、以下、極細いタテハケ目調整である。

2. 口径21.0cm、器厚6.5mm。これも下城式甕で、突帯上部からわずかに外反する。口縁端はわずかにくぼんでおり、断面は角ばっている。刻目突帯は口縁下1.8cmのところのところに一条めぐるが、断面はややだるい三角形をなし、それほど高くない。貼り付けはやや粗雑で突帯上部はヨコナデであるが下部はナデられた形跡を残していない。外面、にぶい黄褐色 (Hue 10 YR 6/4)、内面、灰褐色 (Hue 5 YR 6/2) を呈し、外面に煤の付着をみる。1.0mm~2.0mmの砂粒を含み、石英の混入もみられる。焼成は良好で、突帯より上部と口縁端はヨコナデで、以下はタテハケ目調整、内面はナデ調整される。

3. 4. 5. 6. (5 図)

3, 4, 5, 6, は下城式甕の口縁部、または口縁直下の部分と考えられる一群である。3, 5, を除いて風化が激しく、いわゆる鼠歯状の細かいキズが器内外いちめんを観察できる。3は上記の1, 2, と同じく突帯上部からゆるく外反して口縁端を平坦につくるもの。4, は胴上半部がゆるく内湾し、二条の刻目突帯をもつもの。これは焼成が軟調であるため



第4図 遺物散布図 (縮尺 1/100)

に突帯部の風化が著しい。5は丁寧に貼り付けられた刻目三角突帯を持ち、突帯も高くつくられている。刻目は深く、鋸歯状に刻まれる。6は突帯上部が外反せず直行し、平坦につくられた口縁端は内傾している。3, 4, 5, 6, の色調、胎土等は後記の土器観察表にまとめて掲載する。

◎ 倒「L」字状口縁をもつ甕（5図7, 8）

L字状口縁を有する甕形土器は7, 8, の二点である。

7. 口径29.6cm、器厚8.5mm。内湾する胴上半部に台形突帯がつきL字口縁をつくる。貼り付けL字口縁であると思われるが、断面からも明確に貼り付け部を確認できないために図化していない。口縁の器体内側には、突帯貼り付け時の整形によると思われる凸帯を残し、器体外面の台形突帯直下も指頭幅でへこんでいる。口唇部は凹線状を呈する。

器体内外面とも全体に鼠歯状のキズが顕著である。外面、内面とも橙色（Hue 7.5 YR 6/8）を呈し、砂粒、石英が多く混入する。断面を観察すると1mm×10mm、2mm×3mmほどの大きな間隙がみられ、焼成は良くない。前述したとおり全面に鼠歯状痕がみられるため、調整はさだかではないがナデ調整を主とするものと思われる。

8. 口径21.6cm、器厚7.0mm。直行する口縁に台形突帯で貼り付け口縁をつくる。L字のはり出し部が際立っている。口唇部は内くぼみを呈して、口唇直下に明瞭なヨコナデ調整を観察する。胎土に1.0mm程の多量の砂粒と石英を少量、角閃石を極少量含む。焼成は極軟調であり、器内外面ともにぶい橙色（Hue 7.5 YR 7/4）を呈している。口縁上面、下面ともヨコナデ、器内外は指頭ナデ調整である。

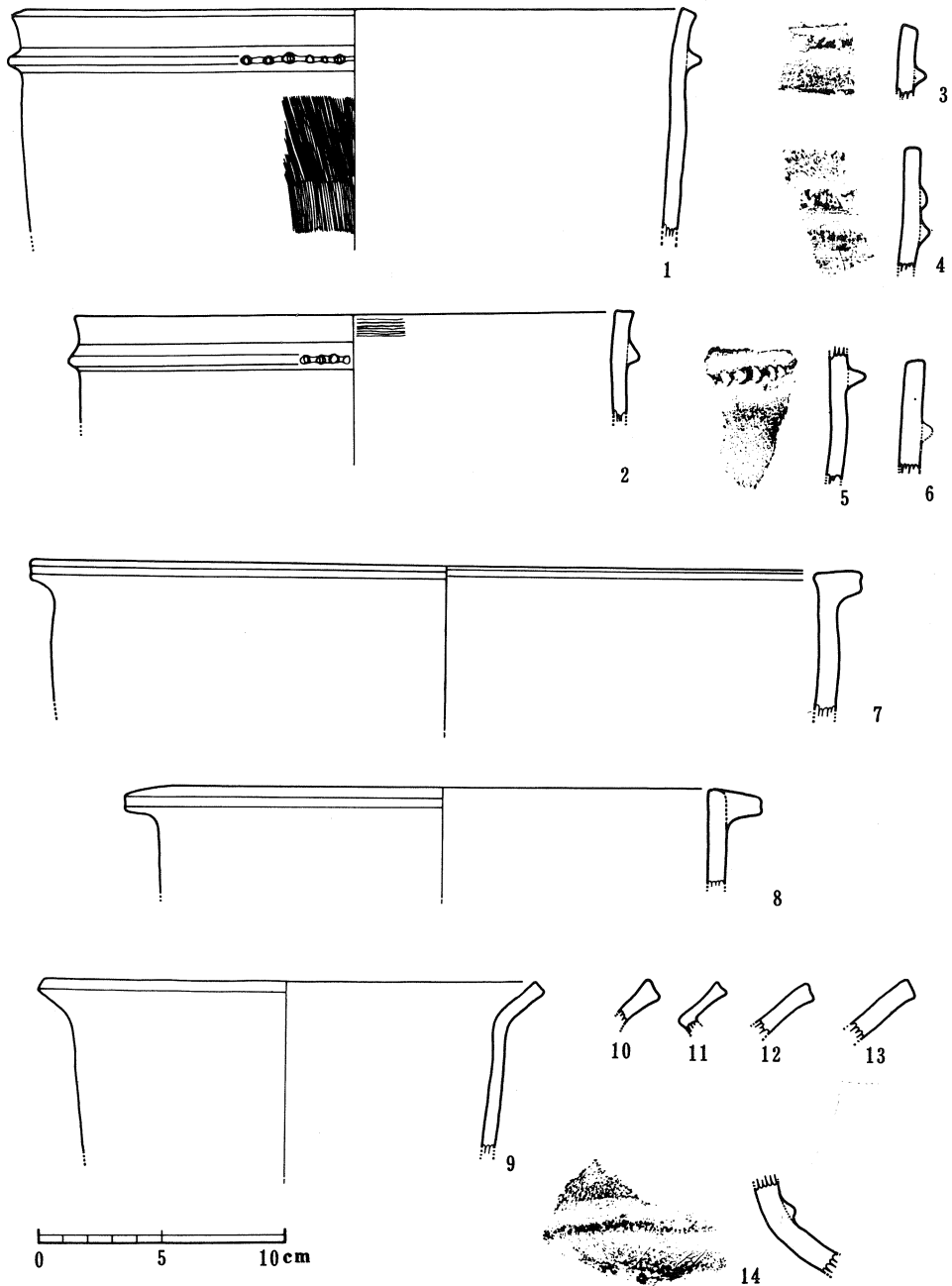
◎ 「く」の字口縁甕（5図9）

9. 口径19.7cm、器厚5.0mm。薄手の小形甕であり、口辺部が頸部で急に「く」の字状に外反する。口縁端は平坦で、胴部に比べて肥厚している。0.1～0.5mmほどの細かい砂粒と石英を多く含み、角閃石を極少量含む。器体内外面ともに橙色（Hue 7.5 YR 6/8）をしており、外面下方に一部煤が付着する。焼きは普通である。これも全面に鼠歯状痕がみられ、調整さだかではないが、ナデ調整主体と思われる。

10. 11. 12. 13. （5図） これ等は「く」の字口縁甕の口縁部である。10, 11, 12は口縁が肥厚したうえ口縁端は凹線状を呈する。胎土、焼成等については後記の土器観察表にまとめて掲載する。

◎ 壺（5図14、6図15, 16）

14. 器厚9.3mm。これは短頸壺の頸部付近で断面三角形を一条巡らしている。胴部中位に



第5图 出土遺物実測図(1) (縮尺 1/3)

最大径がある球形に近い形状を持つと思われる。突帯は基底幅が広く、突帯高が低い。風化を考慮に入れてもかなり鈍いつくりである。ヨコナデによる貼り付けが歴然としている。色調は内外ともにぶい黄橙色 (Hue 10 YR 7/4) で、茶色の細かい砂粒を多く含んでいる。焼成は軟調である。

15. 器厚 7.0 mm。15は頸部から胴部上半部にかけて遺存するもので口縁部を欠いている。最大径が胴部中央付近にくる短頸壺であろう。器体外面の風化が甚しく、砂粒が露出している。肩部付近内面に明瞭な指頭押圧痕を残している。器体外面、内面の頸部は橙色 (Hue 7.5 YR 7/6)、内面、褐灰色 (Hue 5 YR 5/1) を呈し、焼成は良好である。

16. 器厚 5.8 mm。頸部から急に外反する口辺部をもつ短頸壺で、頸部に強いアールがついている。口唇は丸くおさめられ、口辺に一孔、穿孔されている。孔はおそらく2孔単位であったろう。器外面は風化が少なくよく保存されている。器体内外ともに、ぶい橙色 (Hue 7.5 YR 7/4) を呈して、0.5~1.0 mmほどの粒のそろった砂粒、石英を含んでいる。焼成は極めて良好である。

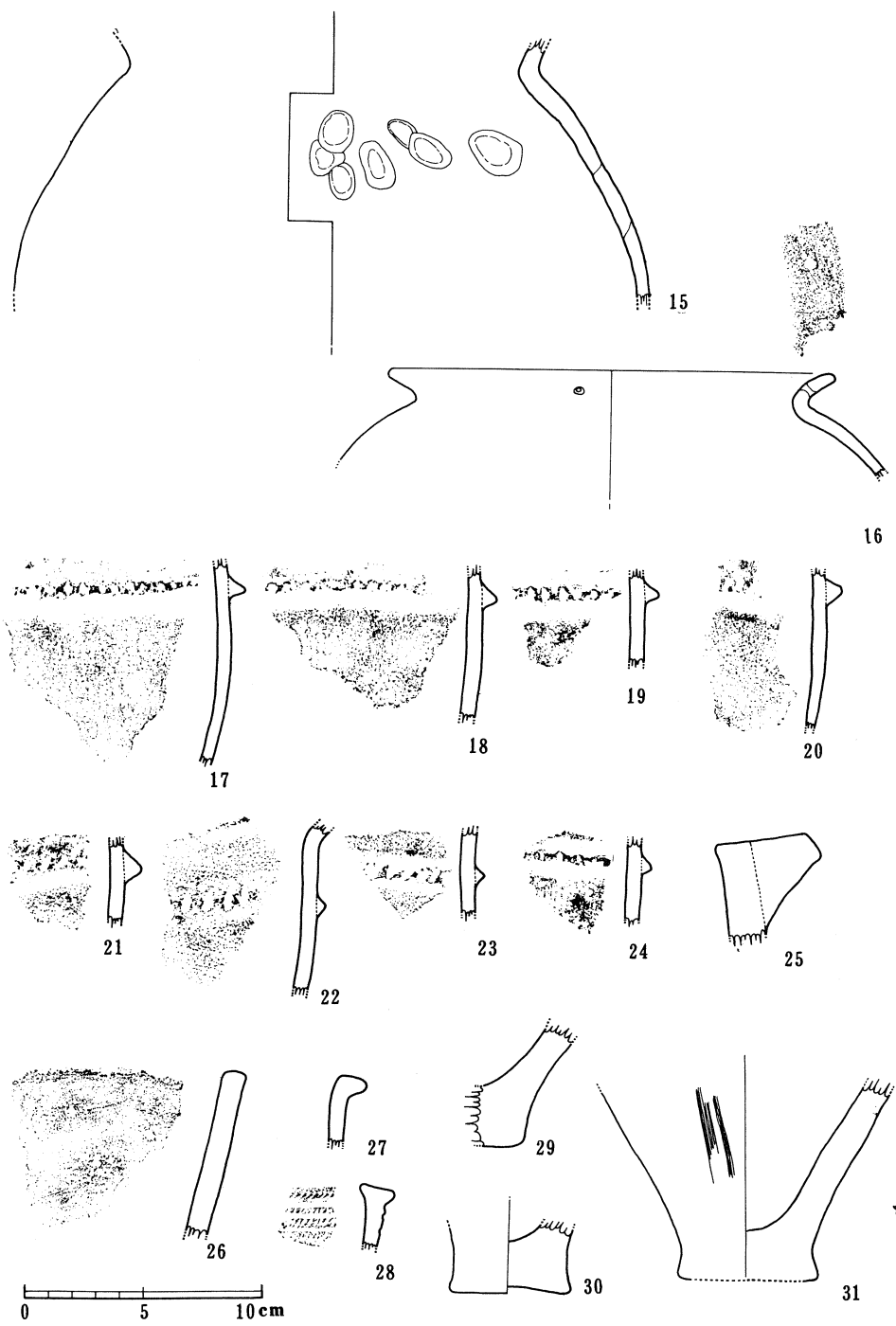
17. 18. 19. 20. 21. 22. 23. 24. (6図) この一群は甕の刻目突帯部分である。17, 18, 19の突帯は断面三角形の上辺が下方に垂れているのが特徴で、突帯高は比較的高い。刻目は縦に細かく刻まれている。17, 18, 19はいずれも5.0 mm×7.0 mm程の大粒の石英、砂粒を含み、焼成は硬調である。20, 21は断面正三角形の突帯を持つ。刻目は斜めに浅く施される。22, 23の突帯は高さが極めて低く、斜めに施された刻目は密で幅広である。23では胴部に達するまで押圧されている。22には明らかに「く」の字口縁と思われる口縁部の一部が遺存している。22は器体内外ともヨコナデ、23は突帯直上、下が指頭幅でヨコナデの他、上部、下部とも斜めのハケ目、内面ナデ調整である。

25. (図6 25) これは大形甕の口縁突帯部であるが、遺存が小さいため口径は不明である。器体内側に突帯貼り付け時の整形によると考えられる凸帯が認められる。器体外面、内面ともに橙色 (Hue 7.5 YR 6/8) をして、外面ヨコナデ、内面指頭押え調整である。胎土に0.1 mmほどの長石、1.0~3.0 mmほどの石英、金雲母を多く含んでいる。焼成は不良。

26. 27. 28. (6図)

26. は鉢形土器の口縁部と思われ、器体内面、口唇部は著しく風化している。外面の口辺部付近はヨコナデ、以下はミガキ調整となる。ぶい黄褐色 (Hue 10 YR 7/3) を呈し、胎土に0.5 mmほどの茶色砂粒、0.2~0.5 mmの砂粒、石英を多量に含む、焼成は良好である。

27. は口縁部が突帯状に肥厚しつつ外反するもので、シャープさを欠く。小形の甕である



第6図 出土遺物実測図(2) (縮尺 1 / 3)

う。肥厚した口縁部は貼り付けではなくつまみあげである。胎土に1.0～1.2mmほどの多量の砂粒と1.0mmくらいの石英を含んでおり精選されていない。焼きも軟調である。風化が著しく、調整の観察不可能である。

28, は「T」字口縁状に器体内側にも口縁がはりだしている。外面の口縁は出し部に細かな刻目をもち、直下はヘラ状の工具で斜めに沈線を密に施したあと、3条の凹線を巡している。口縁の平坦部と器体外面には煤が付着し、黒褐色 (Hue 10 YR 3/1) を呈し、内面は灰黄褐色 (Hue 10 YR 5/2) を呈する。内面ヨコナデ調整、口縁平坦面はナデ調整で、焼成は堅調である。

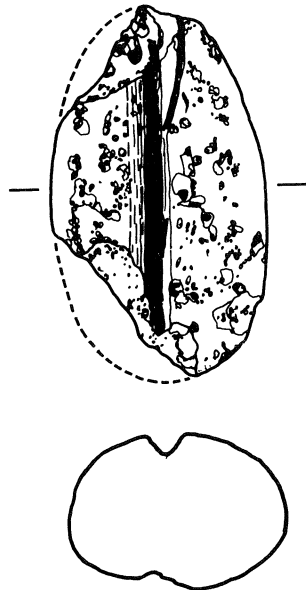
(2) 軽石製浮子 (7図, 8図, 9図)

軽石塊が多く出土したが製品と思われるものは3点である。過去、石神遺跡からは軽石製器台、蓋が出土しており、これ等の軽石塊もその一部であるかもしれないが、ほとんど原形を留めていない。軽石製浮子はそれぞれ異なった形態を持ち興味をひかれる。機能差であろうか。9図はおそらく未製品であろう。同形状で穿孔されたものを昭和46年発掘遺物のなかで実見している。

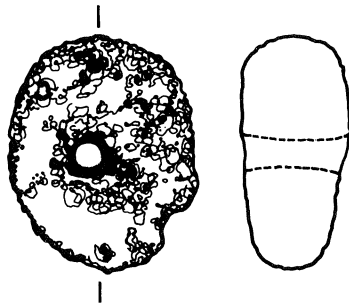
現長9.8cm、幅5.7cm、厚さ4.1cmを測る楕円形状を呈する浮子である。V字形の溝を切っている。(7図) 長径6.2cm、短径5.0cm、厚さ2.9cmで円形に近い形状である。中央に穿孔され、孔径0.8cmを測る。(8図) 長さ4.5cm、幅3.6cm、厚さ2.1cmを測る。側面以外は平坦に加工されている。(9図)

6. 結 語

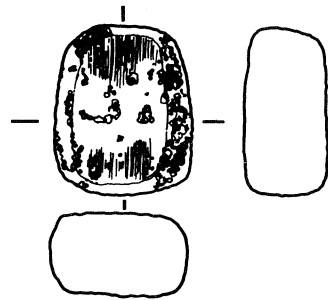
今回の調査では、遺構の確認には至らなかったが、遺跡の広がりやを多少なりとも把握することができた。出土土器は遺構に伴わない耕作による攪乱層からの出土であるため、細破片がほとんどを占めて、実測・図化できたものは極僅かであったが、掲載できたものなかで若干の検討を加えたい。実測図掲載の土器のなかで最も古いタイプを示すものは、下城式甕



第7図 軽石製浮子 (縮尺1/2)



第8図 軽石製浮子 (縮尺 1/2)



第9図 軽石製浮子 (縮尺 1/2)

(5図1~6)と、倒「L」字状口縁(5図7, 8)を有する甕であろう。下城式甕は石川^{注1}氏編年においては前期Ic期に出現し、中期を中心に出土するが、本遺跡出土のものは1のように器壁が薄く、口縁部に刻目もなく、刻目突帯から口縁部までが比較的長くて外反するというタイプで、新しい要素を持っているのではないと思われる。下城式甕は後期初頭IVa^{注2}期までの存在が知られており、本遺跡出土の下城式甕も、前述の形態や共伴の土器からして後期IVa期に比定できるのではないと思われる、その存在の下限を示すのかもしれない。ただ、5図4の二条突帯をもつものは、やや古いタイプに属すると思われる。5図7, 8の倒「L」字状口縁甕は、断面台形状を呈する貼り付け突帯を特徴としている。おそらく、7, 8はその下部に2~3条の突帯を有すると考えられる。

口縁部突帯は断面三角形から台形に変化して、同時にやや拡張され倒L字化が進行するとされ、8はその典型である。山中氏の編年にあてはめれば、IIb期に比定しうるものである。

9, の「く」の字に外反する口縁をもつ甕と、16の口辺部に孔を有する壺は、後期初頭のIVa期の新田原遺跡6号住居や、宮崎学園都市堂地西遺跡7号住居出土の土器に類例がみられる。しかし、本遺跡の9, 16は前述遺跡出土のものに比べ、かなり小型で稚出なつくりでありやや後出するものと思われる。22に代表される「く」の字口縁で下部に刻目突帯を有する甕は中溝遺跡出土の土器を典型とするもので後期IVa期に比定できる。ただし、刻目がややダルなものが含まれこれもやや後出するのかもしれない。底部は中期土器に典型的な脚台状を呈するものの出土はなく、いずれも後期の範疇に入れるべきものである。28の「T」字状の口縁部は過去の石神出土遺物のなかにも類例がなく初見である。胎土などから、他のも

のと比べ異質なものが感じられる。位置づけは不明である。以上のように今回の調査で出土した土器は、かつて石神式とよばれた典型的な5図7、8のようなものもみられるが、大半は後期初頭から前半頃の範疇に入るべきものであろう。

出土した土器の器面をみると、遺物の稿で述べたように二次的な鼠歯状のキズをもつものが多数あった。鼠歯状のキズは他の遺跡出土の土器片にも折々みかけるが、石神のものはその頻度が高いように思う。器表面、裏面に2、3ヶ所みうけられるものから、全面くまなく観察できるものまでである。5図7の倒「L」字状口縁甕にいたっては、器表裏面はもちろんのこと断面にまでくまなくみられる。出土した土器片306点のうち鼠歯状のキズのあるものは241点を数え79%に達する。昭和46年発掘の遺物を観察する機会を得たが、これ等にも数多くみられた。

石器については、弥生時代を代表する典型的なものは今回出土していないが、本遺跡の一つの特徴でもある軽石製品が出土している。用途が異なると思われる三種類の軽石製浮子がそれである。

石神遺跡の出土遺物、とりわけ土器については、弥生時代の良好な遺跡調査が少なく、比較対象しうる良質の資料に恵まれなかったために、明確な位置づけが困難であった。しかし、最近における発掘調査の増加は、その失なわれたリンクを徐々にではあるが明らかにしつつある。近年、調査された弥生前期～中期に比定しうる遺跡に児湯郡高鍋町所在の持田中尾^{注5}遺跡、児湯郡新富町所在の^{注6}鎧遺跡がある。

ことに持田中尾遺跡は下城系の甕、亀ノ甲式系甕、城の越系の壺・甕の他石剣、抉入柱状片刃石斧、扁平片刃石斧等の多量の大陵系磨製石器を伴って、前期～中期の様相を代表するものとなっている。これらの遺跡は低丘陵上に位置し、砂丘上に営まれた石神遺跡とは生活環境を異にするとはいえ、その良好な出土遺物は、石神出土の遺物とともに本地域の弥生時代中頃の土器様相を考察する上で重要なものである。また、ここ数年発掘調査が続けられている宮崎学園都市遺跡群^{注7}では、弥生時代後期から終末期にかけての土器を多量に発掘しており、今後の編年研究の進展が期待される。

注1. 石川悦雄「宮崎平野における弥生土器編年試案」一素描（Mk. II）『宮崎考古』

第9号 1984年

注2. 同上

注3. 同上

- 注 4. 宮崎市教育委員会，鶴島分室において実見
- 注 5. 「持田中尾遺跡」高鍋町教育委員会 1982年
- 注 6. 「鏡遺跡・藤掛遺跡」新富町教育委員会 1983年
- 注 7. 「宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書 第2集」宮崎県教育委員会 1985年

弥生式土器観察表

図版 番号	遺物 番号	器 種	調		焼成	色		胎 土	備 考
			外 面	内 面		外 面	内 面		
5 図	3	甕 (口縁)	横ナデ	刻目より上 部が横ナデ	不良	にぶい褐色 (Hue 7.5 YR 5/4)	にぶい褐色 (Hue 7.5 YR 5/4)	長石 (1.0 mm) 多く含む 石英 (1.0 mm) 多く含む 角閃石少量含む	
5 図	4	甕 (口縁)	風化(おそ らく横ナデ)	風化(おそ らく横ナデ)	不良	橙 (Hue 5 YR 7/6)	橙 (Hue 5 YR 7/6)	砂粒 (1.2 mm) 多く含む 石英 (1.0 mm) 多く含む	全面(断面も含む)に鼠歯状 痕がある
5 図	5	甕 (口縁)	横ナデ・ナデ	指による 押え	良好	橙 (Hue 7.5 YR 6/8)	橙 (Hue 7.5 YR 6/8)	砂粒 (1.0 mm) 多く含む 石英 (2.0 ~ 3.0 mm) 多く含む	内面に一部鼠歯状痕がある
5 図	6	甕 (口縁)	風化(おそ らく横ナデ)	横ナデ	不良	橙 (Hue 7.5 YR 6/8)	橙 (Hue 7.5 YR 6/8)	砂粒 (1.0 ~ 2.0 mm) 多く含む 石英 (1.0 ~ 2.0 mm) 多く含む	突帯を欠損、内・外面に鼠歯 状痕がある。
5 図	10	壺 (口縁)	風化(おそ らく横ナデ)	横ナデ	不良	浅黄橙 (Hue 10 YR 8/3)	浅黄橙 (Hue 10 YR 8/3)	茶色砂粒 (1.0 mm) 多く含む 石英 (0.5 mm) 含む	
5 図	11	壺 (口縁)	横ナデ	横ナデ	良好	橙 (Hue 7.5 YR 6/6)	橙 (Hue 7.5 YR 6/6)	砂粒 (1.0 mm) 少量含む 長石 (0.2 mm) 少量含む	内・外面に鼠歯状痕がある
5 図	12	壺 (口縁)	横ナデ	横ナデ	良好	橙 (Hue 7.5 YR 7/4)	橙 (Hue 7.5 YR 7/4)	緻密	内面に煤付着
5 図	13	壺 (口縁)	横ナデ	横ナデ	良好	にぶい橙 (Hue 7.5 YR 7/4)	にぶい橙 (Hue 7.5 YR 7/4)	砂粒 (0.01 mm) を含む 石英 (0.01 mm) を含む	内・外面に鼠歯状痕がある

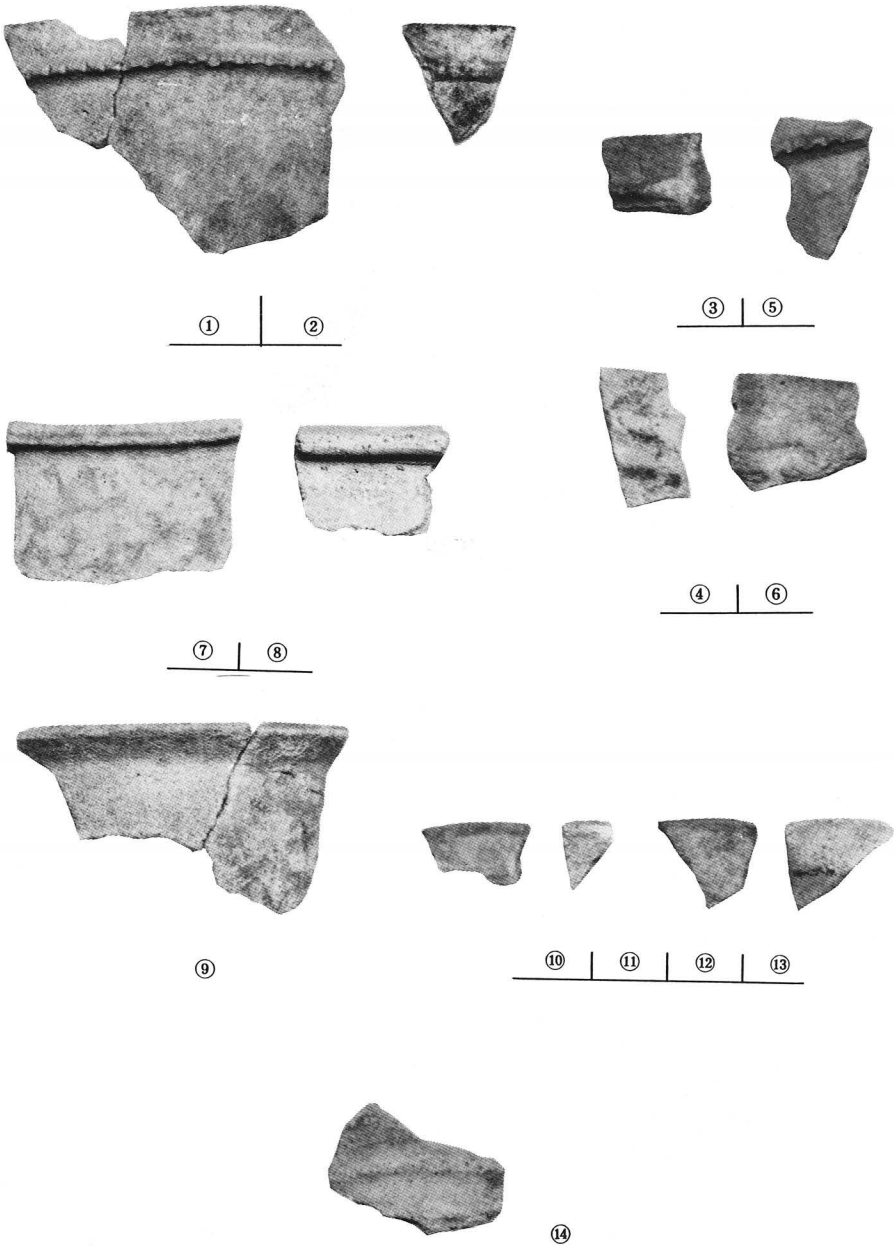


調査風景

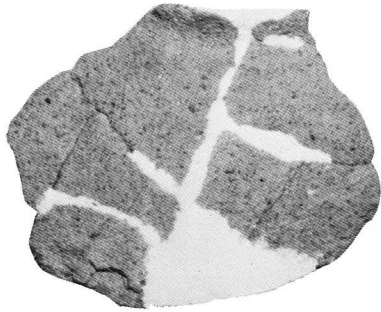


遺物出土状況

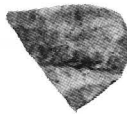
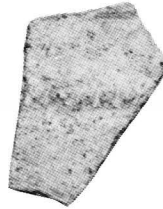
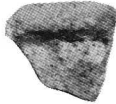
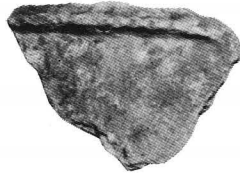
図版
2



出土土器 1 (番号は実測図番号)



⑮ | ⑯



⑰ | ⑱ | ㉓
⑲ | ㉑ | ㉒ | ㉔



㉑ | ㉒ | ㉓

出土土器 2 (番号は実測図番号)

図版
4



軽石製浮子

軽石塊

出土土器・軽石製浮子・軽石塊

(付) 昭和59・60年度埋蔵文化財発掘調査一覧

(昭和61年2月 現在)

番号	遺跡名	所在地	発掘調査日	調査主体	調査員	遺構・遺物	備考
1	源藤遺跡	宮崎市源藤町 字源藤886番地 他50筆	60. 2. 4) 60. 3. 1	宮崎市教育 委員会	野間重孝	弥生土器 土師器・須恵器	確認 調査
2	下ノ平地地下式	小林市大字 水流迫下ノ平 179の3	60. 2. 19) 60. 2. 21	小林市教育 委員会	永友良典	鉄鏃・土師器 鉄剣・刀子	
3	東二原地下式	小林市大字真方 字二原6011	60. 2. 27) 60. 3. 1	小林市教育 委員会	永友良典	鉄鏃・土師器 刀子	
4	鬼付女西遺跡	児湯郡新富町 大字上富田 字鬼付女	60. 3. 12) 60. 3. 15	県教委	永友良典	溝状遺構 土師器・陶磁器	確認 調査
5	志和池地下式	都城市下水流町 2576～1	60. 3. 12) 60. 3. 20	都城市教育 委員会	矢部喜多夫	土師器	
6	朴木遺跡	北諸県郡高崎町 大字江平3639の 1番地	60. 3. 18) 60. 3. 25	高崎町教育 委員会	長津宗重	石蓋土墳墓 磨製石鏃	確認 調査
7	千畑横穴群	西都市大字穂北 字谷ノ前4856、 4862-1	60. 3. 20) 60. 6. 28	西都市教育 委員会	日高正晴	縄文土器・須恵 器・土師器・金 環・勾玉・鉄器 片・柄頭馬具	
8	栗巢地下式	国富町大字 八代南俣5419	60. 3. 25) 60. 3. 29	国富町教育 委員会	永友良典	鉄鏃	
9	宮崎学園都市 前原北遺跡	宮崎市大字熊野 字前原	60. 4. 3) 60. 12. 28	県教委	北郷泰道 谷口武範	弥生住居址・掘 立柱建物・集石 遺構・弥生土器 陶磁器・石器	
10	丹後堀遺跡	東諸県郡高岡町 大字花見 2398～1	60. 4. 18) 60. 4. 19	高岡町教育 委員会	面高哲郎	遺構・遺物なし	確認 調査
11	赤木遺跡	延岡市舞野町 1477～15	60. 4. 30) 60. 6. 8	延岡市教育 委員会	永友良典	ナイフ形石器 尖頭器・細石刃 細石核・石鏃	

宮崎県文化財調査報告書

第 29 集

昭和 61 年 3 月

発 行 宮 崎 県 教 育 委 員 会

編 集 宮 崎 県 教 育 庁 文 化 課